

うめ つき い せき

埋 築 遺 跡

都治地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書 I

2002年3月

島根県浜田農林振興センター
江津市教育委員会



I区 溝状遺構 1 S→N

序

江津市教育委員会では、島根県浜田農林振興センターの委託を受けて、平成9年度から都治地区県営ほ場整備事業予定地に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しておりますが、このたび報告書を刊行する運びとなりました。本報告書は、平成12年度に本調査された江津市都治町に所在する埋築遺跡の調査成果をとりまとめたものです。

江津の中央を流れ奔る江の川は、中国太郎の異名を持つ中国地方最大の河川として知られていますが、古来より中国路陰陽を結ぶ大動脈として、文化、経済、人の交流を促してきました。15世紀の半ばには既に江の川河口は対外貿易の一基地となり、環日本海交流の要衝の地として重要視されていたことが中国朝鮮などの文献により明らかになっております。

今回の調査は、昭和46・47年に行なわれた波来浜遺跡調査以来、江津市東部では実に29年振りの本格的な調査となりました。都治の地に縄文時代から人々が生活を営み、中世においては祖先を弔う屋敷が存在していた事がわかり、今まで不透明だった江津市の古代史にとって大変貴重な発見となりました。来年度発刊を予定している都治町・高津遺跡の報告書と併せて、本書が地域の歴史と文化に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査ならびに本書を刊行するにあたり、ご協力いただきました地元の皆様や島根県浜田農林振興センター、島根県文化財課、島根県埋蔵文化財調査センターをはじめ、多くの関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成14年3月

江津市教育委員会
教育長 野上 公司

例　言

1. 本書は島根県浜田農林振興センターが実施した、都治地区県営ほ場整備事業に伴い江津市教育委員会により平成11年度～平成13年度に本調査された遺跡のうち、埋築遺跡発掘調査における本報告書である。

2. 発掘調査は島根県浜田農林振興センターの委託金と文化庁の国庫補助金を得て、江津市が実施した。

3. 本遺跡の調査履歴は以下のとおりである。

昭和48年度石斧表抜

平成9年度試掘調査

平成10年度確認調査

平成12年度一部本調査及び確認調査

4. 調査体制は次のとおりである。

事務局　江津市教育委員会

平成9年度	野上　公司	教育長	半成12年度	野上　公司	教育長
	佐々葉牧生	生涯学習課長		岩田　春正	生涯学習課長
	堀川　哲郎	同　課長補佐		藤田　裕	同　係長
	盆子原悦子	同　主事		國澤(盆子原)悦子	同　主事
調査担当	宮本　徳昭	同　主事	調査担当	梅木　茂雄	同　主事補
遺物整理	高島　紀子	同　嘱託員	遺物整理	松原あゆ子	同　嘱託員
平成10年度	野上　公司	教育長	平成13年度	野上　公司	教育長
	横山　豊	生涯学習課長		岩田　春正	生涯学習課長
	堀川　哲郎	同　課長補佐		藤田美恵子	同　課長補佐
	盆子原悦子	同　主事		林　正司	同　係長
調査担当	梅木　茂雄	同　嘱託員		國澤　悦子	同　主事
遺物整理	高島　紀子	同　嘱託員	調査担当	梅木　茂雄	同　主事
			遺物整理	福本加世子	同　嘱託員

5. 調査及び報告書の作成に際し、次の組織、方々に指導・助言をいただいた。記して感謝する。

島根県文化財課、島根県埋蔵文化財調査センター、浜田市教育委員会、西伯斎弥生研究会

6. 報告書の作成は以下の者が携わった。(五十音順)

上野由美恵、梅木茂雄、上手文子、澤津孝、鹿森三鈴、柴田亜希子、恒松明宏、山田ゆう子、

7. 報告書記載の遺物・図面・写真等は江津市教育委員会で保管している。

本文目次

序

例言

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と江東地区の歴史的環境	2
第3章 調査の結果	6
第1節 試掘の結果及び周辺の環境	6
第2節 繁文時代・弥生時代	9
1. 溝状遺構 1	9
2. 包含層 1	9
3. 繁文時代・弥生時代の遺物について	9
4. 小結	10
第3節 古代～中世・近世	11
1. 中世の遺構について	11
2. 古代～中世・近世の遺物について	13
3. 小結	13
第4章 まとめにかえて	14
参考文献	15

挿図目次

第1図 津津市東部の道路	S=1/40,000	3	第11図 建物基礎調査	3	S=1/60	23
第2図 道路地盤周辺の状況	S=1/10,000	3	第12図 建物実測調査	4	S=1/60	24
第3図 レンチ配列図	S=1/2,500	7	第13図 道物実測調査	5	S=1/60	25
第4図 トレンチ上層回	S=1/80	8	第14図 上層1・2号調査	4	S=1/30	26
第5図 文化～弥生時代遺物配列図	17	第15図 道物実測調査	1	S=1/3	32
第6図 1. 滋賀県東部1土層図	S=1/60	17	第16図 道物実測調査	2	S=1/3	33
第7図 2. 包含層1土層図	S=1/60	17	第17図 道物実測調査	3	S=1/3	34
第8図 古代～中世・近世遺物配列図	18	第18図 道物実測調査	4	S=1/3	35
第9図 「区画」遺物調査状況	S=1/100	19	第19図 道物実測調査	5	S=1/3	36
第10図 「区画」遺物調査状況	S=1/100	20	第20図 道物実測調査	6	S=1/3	37
第11図 道物実測調査 1	S=1/60	21	第21図 道物実測調査	7	S=1/3	38
第12図 道物実測調査 2	S=1/60	22					

写真図版目次

名額 滅状遺構 1 (S→N)	写真12 弥生時代遺物 2 (第16図・②のみ17回)	64
写真1 滅跡遺構 畠景	写真13 弥生時代遺物 3 (第16回)	65
理塗跡 畠森候選景	写真14 弥生時代遺物 4 (第17回)	65
写真2 主要1レンチ	写真15 弥生時代遺物 5 (第18回)	66
写真3 道路面の状況 (E→W)	写真16 弥生時代遺物 6 (第18回・②のみ17回)	66
写真4 滅跡遺構 1 (第1回-1)	写真17 弥生時代遺物 7 (第19回)	67
遺物内状況	写真18 弥生時代遺物 8 (第19回)	67
写真5 Ⅰ区段遺構 1調査風景 (E→W)	写真19 弥生時代遺物 9 (第20回)	68
写真6 Ⅰ区段遺構 1上層板状況 A (E→W) (第5回-2)	写真20 弥生時代遺物 10 (第20回)	69
写真7 Ⅰ区段遺構 1上層板状況 B (W→E) (第5回-2)	写真21 Ⅰ区段土器黒曜石片	69
写真8 Ⅰ区段遺構 1出土板状況 (W→E)	写真22 土塊 1 滅状遺構 2 灰土 土師器 (第21回)	70
写真9 Ⅰ区段六列3 戲抜状況 (S→N)	写真23 土塊 1 滅状遺構 2 灰刀 (第21回)	70
写真10 Ⅰ区段六列3 戲抜状況 (W→E)	写真24 Ⅰ区段土器	71
写真11 トレンチA (第5回)	写真25 Ⅰ区段土器陶器及び無田井土陶器	71
泥炭質 石斧群	写真26 Ⅱ区段土、中田細器 (表4)	72
写真12 繁文時代遺物 1 (第15回)	写真27 Ⅱ区段土瓦・錫口 (第21回)	72
繩文時代遺物 2 (第15回)	写真28 Ⅲ区段土器 (表4)	73
写真13 弥生時代遺物 1 (第16回)	写真29 近世以降遺物 (表4).....	73

表目次

表1 津津市東部の遺跡一覧	グラフ1 桂原跡墳丘	31
表2 道路地盤調査表	グラフ2 道物出土量・個	50
表3 道物分析表	グラフ3 刮削痕片集計	51
表4 道物分類表	グラフ4 作業前開削部比較数集計	51
表5 道物1号追跡一覧表	グラフ5 弥生時代土器浜田一覧	51
表6 土・土器鉢堅度計表			
表7 弥生時代土器堅度 表表			

グラフ目次

第1章 調査に至る経緯

都治地区県営ほ場整備事業に先立ち、江津市は平成9年1月6日付で、江津市教育委員会（以下市教委）へ埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて照会を行った。これを受け市教委は平成9年1月13日から分布調査及び試掘調査を行った。調査の結果、周知の遺跡である守野勘吉氏宅付近遺跡、埋築遺跡の周辺は遺跡であることが確認された。平成10年6月9日島根県教育庁文化財課を交え協議を行った結果、埋築遺跡の範囲及び性格を確認する為、確認調査が必要と指導を受けた。平成10年9月21日浜田農林振興センター所長より江津市長へ事業区域内第3工区の確認調査の依頼があり、同9月30日に委託契約を結び平成10年10月1日～平成11年3月19日にかけて調査及び整理を行った。調査は遺跡範囲の75,000m²に対して、2m×4mを基本としたトレンチ（確認坑）30箇所により行なった。調査結果を踏まえ、高津遺跡・埋築遺跡については、開発により一部消滅する恐れがあるため、事業で掘削される個所の本調査が必要と回答。調査費については事業主体である浜田農林振興センターに負担していただき、受益者負担分については文化庁の国庫補助を受けて平成11年度～13年度にかけて両遺跡の調査を行った。調査は平成11年度に高津遺跡Ⅰ区を行ない、平成12年度は埋築遺跡Ⅰ区・Ⅱ区調査を6月～12月まで、高津遺跡Ⅱ区を12月から3月まで行なった。平成13年度は高津遺跡Ⅲ区調査を4月から12月末まで、埋築遺跡報告書作成を平成14年1月から行なった。埋築遺跡Ⅱ区の包含層については、上面を本調査、下面は確認の為の試掘調査に留めた。Ⅰ区は、ほ場事業が遺構に影響しないため、床土除去後に3日ほど確認調査を行った。現地説明会は11月26日に開いた。参加者は約80人。調査の内容などは江津市出前講座などで活用した。報告書の作成は平成14年1月7日から行い、2月1日に入稿した。



高津遺跡上空より埋築遺跡、日本海を望む S→N

第2章 位置と江東地区の歴史的環境（第1図・表1）

江津市は、日本海側の沿岸部に位置し、中国山地より流れ下る江川により中央で分断されており、沿岸部東側を江東地区、西側を江西地区と呼んでいる。険しい山地は少なく、市域は準平原の前地斜面で形成されている。江東地区的入り組んだ旧沿岸線は海浜部から丘陵までクロスナ層を間に挟んだ新・旧砂丘が厚く堆積している。この為海浜部は小規模の後背湿地を持つ低砂丘陵が多く存在する。江東地区で最大の盆地を持つ都治は交通の要衝として機能しているようである。今回の調査では、古代山陰道及び関連遺跡は確認できなかった。江東地区で本格的な発掘調査が行われたのは、波来浜遺跡（S46～47）のみで、今回の一連の調査が2例目である。このため地域全体の歴史を把握することは困難であるが、以下表探・調査等により分る範囲で江東地区の歴史を概観する。

縄文時代

海浜部で後期の遺跡が確認されている。波来浜遺跡北方で、土器が表探されている。^{尾浜}地区では偏平磨製石斧が表探された。また、後期のクロスナ層が確認されており、遺物もまとまって出土している。内陸部では遺跡は未確認。

弥生時代

埋築遺跡で縄文晩期から弥生末期にかけての包含層と、前期の土器を伴う溝状遺構が一部調査された（本報告）。波来浜遺跡では前期の赤彩壺が出土しており、壺棺の可能性を指摘されている。

中期の遺跡は埋築遺跡の包含層の他、波来浜遺跡で張り石の埴丘墓が確認されている。後期に入ると、波来浜遺跡張り石埴丘墓が継続される他、高津遺跡で住居跡等が確認されている。

古墳時代

弥生時代末から古墳時代初頭に掛けての住居跡が高津遺跡で確認された。^{尾浜}遺跡で竹管文を施されたもの等前期の土師器小片が数点表探された。中期では、据付かまど（炉）を伴った住居跡等が高津遺跡で調査されている。後期に入ると、高津遺跡で粘土採取坑と思われる土坑群が調査されている。また、須恵器模倣の磨研土師器や「郡」へら書き須恵器坏が出土している。波来浜遺跡で土師器、須恵器、鉄斧が出土している。古墳では箱式石棺を伴う尾浜古墳と佐古ヶ丘横穴墓群が知られている。江東地区での横穴式石室は未確認である。その他各地で遺物が表探されているが、明確な遺構は確認されていない。

奈良平安時代

主要な遺跡は、長田遺跡、波来浜遺跡の2箇所のみだが、それぞれ地元では長田千軒、波来浜千軒と呼ばれており興味深い。両遺跡からはともに、土師器、底部糸切り須恵器等が出土しているが、波来浜遺跡ではその他に製塙土器、土錘や須恵器・石帶一組を伴った火葬墓が調査されている。それ以外の遺跡からは当該期の遺物はまとまった出土がない。

中世

埋築遺跡で、土坑墓を伴う建物跡が調査された。高津遺跡でも掘立柱建物跡等が調査されている。江東地区では今まで多くの山城が確認されているが、発掘調査されたものは鎌満城跡と千本崎城の一部のみで、時期を確定できる遺物はなかった。宝篋印塔は各地で確認されている。波来浜遺跡で、炉状遺構1基が確認されている。また、「g」字墨書土師器、前期の陶磁器と銭957枚、羽子板状鉄斧、鉄釘が出土している。遺跡南東で工事立会のさい柱穴群が確認されているが、担当者により中世の可能性が指摘されている。

2km



第1図 江津市東部の遺跡 S=1/40,000

表1 江津市東部の遺跡一覧 中世まで

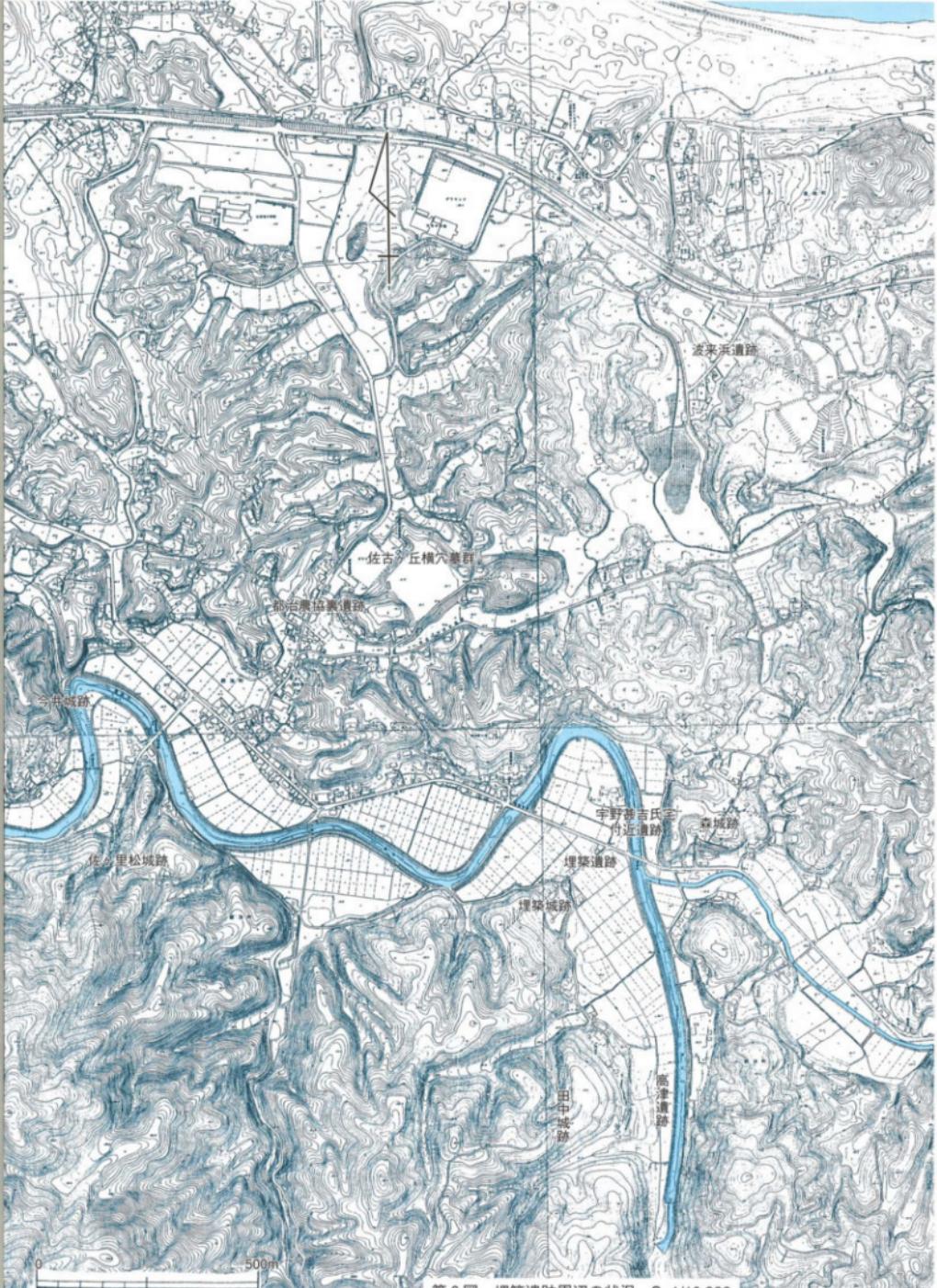
番号	遺跡名	所在地	縄文時代		弥生時代		古墳時代		古代		中世		概要	備考
			新石器	後石器	縄手	中期	後半	前期	中期	後半	後半	後半		
1	長田遺跡	渡津町長田						○	●	●			須恵器、土師器出土	別称長田千軒
2	守段篠塚	渡津町塙田								○	○			
3	大堀遺跡	後地町大堀			○								クロスナ型、弥生土器、土師器、須恵器	遺物不明
4	蔽遺跡	後地町蔽	○			○	○	○					弥生土器、土師器、須恵器	遺物不明
5	尾浜遺跡	後地町尾浜	●			○							クロスナ型、绳文土器、土師器	実免により一部削減
6	尾浜古墳	後地町尾浜				○							箱式石棺	
7	波来浜大火矢	後地町波来浜								○	○		防堤	
8	波来浜遺跡	後地町波来浜	○	●	●		○	●	●	○			弥生埴輪、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鐵器	別称波来浜子野、石器・鐵器
9	宇野勘吉氏宅付瓦窯跡	都治町上都治		○									上都治瓦窯、土器	調査未保存
10	埋蔵遺跡	都治町上都治	○	●	●	●				●	○		弥生前廟溝、小口建物、中世窓、先帝文土器、弥生土器、陶器、土師器	部分認定後保存
11	高津遺跡	都治町上都治			●	●	●	●		●	●		甕窓、水塘遺構、朽土瓦取坑、瓦玉器、陶器	漆盒は保存
12	震橋裏遺跡	都治町中都治						○	○	○			布瓦瓦	須恵器確認 遺物不明
13	佐古ヶ丘横穴墓群	都治町中都治						●					横穴墓4基	酒城
14	神田遺跡	波積町本郷						●					須恵器	
15	本郷遺跡	波積町本郷						●					須恵器	
16	二川遺跡	波積町本郷						●					土師器、須恵器	遺物不明
一	舗瀬城跡	渡津町塙田								○	○			
二	蟹ヶ迫城跡	渡津町長田								○	○			
三	大和田城	渡津町渡津								○	○			
四	千本崎城	松川町太田								○	○			
五	川上城跡	松川町市村								○	○			
六	松山城跡	松川町市村								○	○			
七	殿畠船跡	松川町市村								○	○			
八	櫛城跡	松川町長良								○	○			
九	轟雄城跡	浅利町								○	○			
十	四地蔵城跡	浅利町								○	○			
十一	今井城跡	都治町下都治								○	○			
十二	佐賀里松城跡	都治町下都治								○	○			
十三	埋室城跡	都治町上都治								○	○			
十四	田中城跡	都治町上都治								○	○			
十五	森城跡	都治町上都治								○	○			
十六	高畠城跡	松川町畠田								○	○			
十七	平蔵城跡	松川町畠田								○	○			
十八	林城跡	松川町上津井								○	○			
十九	利光城跡	波積町本郷								○	○			
二十	砥谷城跡	波積町本郷								○	○			

時期区分は大きめに行い、弥生・古墳時代についてはかならずしも前半=前期ではない。

山城の時期は遺物が確認されていないものについては一応大まかに中世としてある。

●は、遺跡の時期を表す。○は遺物が極端に少ないものや、遺跡の時期がはっきりしない場合に用いた。

未標記の時期は茎系をはずして表示した。



第2図 埋葬遺跡周辺の状況 S=1/10,000

第3章 調査の結果

第1節 試掘の結果及び周辺の環境（第3・4図、写真2）

平成9年度及び10年度実施の試掘・確認調査の結果を基に、埋築遺跡周辺の環境について述べる。調査区Ⅰは平成9年度の調査時に、南北の水田面より落ち込んでおり、聞き取り調査の結果と併せて試掘調査の対象から外されていたが、ほ場整備中の床土除去時に遺構が発見された。今回の事業による遺構面への影響は無かった為、プラン検出及び測量のみでⅠは現状保存とした。

今回の調査では基本的に土層は青灰色系粘質土の水平堆積をしており、トレンチ1のように薄い砂層が数層堆積している状況が多く見られる。この土地は、都治川の氾濫が多かったようで、昭和ごろまでよく水害にあっている。調査区西側（トレンチ1～4）は、耕作土の下が青灰色粘質土層の厚い堆積となっている。このあたりは蓮沼の字が付いており、深さ2m以上の湿地だったようである。埋築の名の由来は、この沼を埋めて土地を築いたためともいわれている。

トレンチ3では表上下2.4mほどで、純粋な砂層が確認された。砂層からは弥生後期～末期と思われる土器底部片が一点出土している。後述する包含層1からの流れ込みの可能性が考えられる。調査区東側（トレンチ13～19）も西側と同じような状況だが、水田面の標高は17～18mほどで、西側より2mほど高くなっている。また、トレンチ13・14・16・17・18で河川氾濫による物と思われるレキ砂層が確認された。

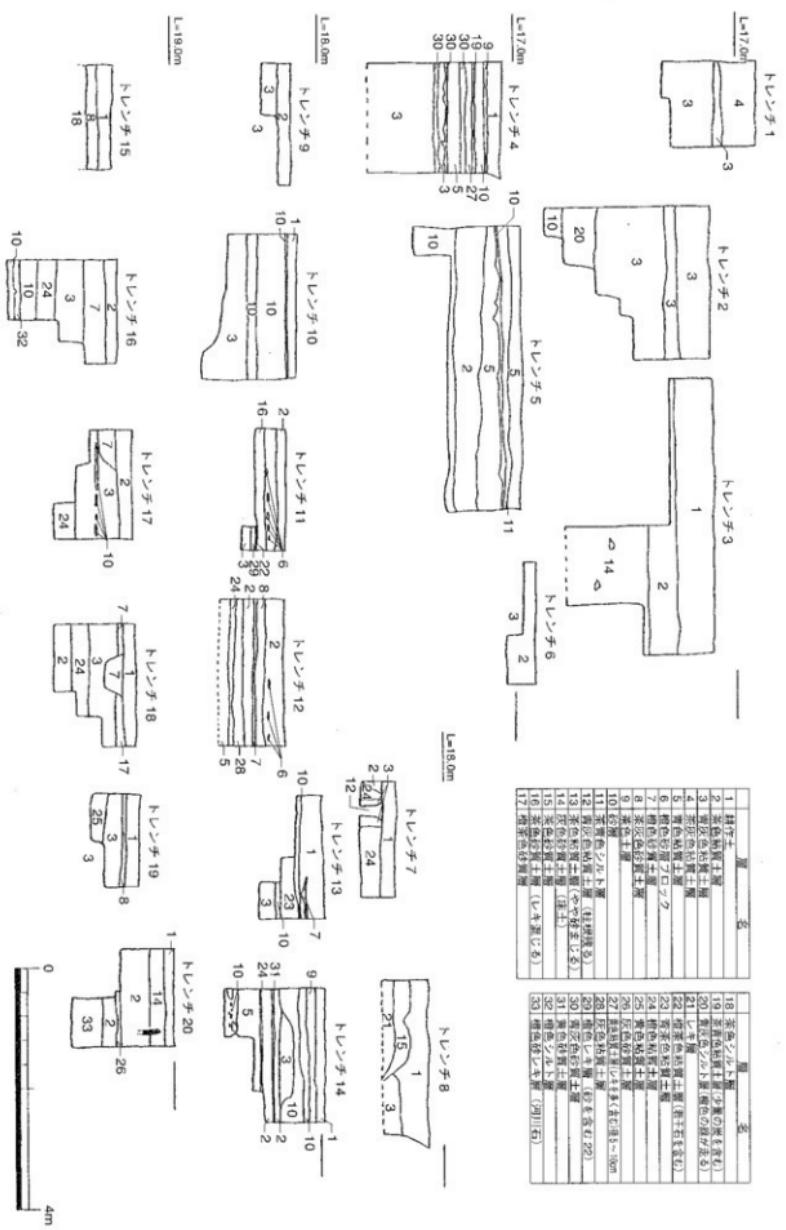
地元の方の話によるとトレンチ13・14のあたりは昭和18年水害以前には大岩が祭られており、宝篋印塔が建っていたと聞いたが、今回の調査では大岩を確認することは出来なかった。なお、宝篋印塔の一部（写真10）は水害後に県道脇に集められ、毎日花が飾られている。3個体分以上あり時期幅もありそうだが、磨滅がひどくおおよそ14～15世紀ごろの物としか分らなかった。

調査区北側では耕作土下に微高地が確認できる。トレンチ6・8は調査区Ⅰ・Ⅱ区で見られる物と同様のレキ基盤層と思われる。トレンチ6では弥生後期土器胴部が出土した。トレンチ8ではレキ層の落ち込みの上に青灰色粘質土が堆積している状況が確認できた。また、レキ層と青灰色粘質上層の境に時期不明の杭列を確認した。トレンチ7などで柱穴と思しいピットの検出が出来た。トレンチ10では南に急な落ち込みが確認された。ここからは荒い鉢目の入った陶器擂鉢片が出土した。おそらく中世の物と思われるが、産地時期などは不明である。調査区北側以北は1mほど高くなつておらず、現在は家屋、及び畑地として利用されている。おそらく遺構はこの微高地にも展開していると考えられる。今回調査された建物はレキ基盤層上に立地し、現在調査区周辺にある建物も概ねこのレキ層上にある。平地に建物を建てる場合には湿地を避け、レキ層や微高地を選択している為に多時期において居住域が重複すると考えられる。なお、蛇行河川の地質的特徴については、参考文献32に詳しい。



第3図 トレーンチ配置図 S=1/2,500

第4図 ハバチ土壌図 S=1/80



第2節 縄文時代・弥生時代

1 溝状遺構 1 (第5図、写真4)

確認調査時に検出された遺構で、ゆるく曲がっている。底部はレキ層に掘り込まれており、断面形状は若干U字状を呈す。底部に青灰色粘質土が堆積している。おそらく遺構上面は削平されており、調査区内での遺物はほとんど確認できなかったが、溝状遺構1溝底より35cm浮いた場所で遺物が出土した。(第16図-12) 時期は弥生前期である。

2 包含層 1 (第5図、写真5・6)

包含層下層は、ほ場事業の範囲が及ばなかったため、一部確認のためトレンチ調査を行った。明確な遺構は確認できなかったが、調査区南方に傾斜するレキ基盤層上に流入した堆積層のようである。レキ層の落ち込みは丘陵を東から西へ傾斜横断する流路のようだが、性格は不明である。遺物を層位ごとに抽出することは出来たが、出土状況は堆積時の搅乱による層位の逆転を現しているようである(グラフ2)。遺物は大まかに形式分類を行った(表4)。包含層の堆積時期は、縄文土器を伴ってはいるが、最下層で弥生後期の土器が出土していることから弥生後期以降に流れ込んだと考えられる。付近に当該期の集落遺跡が存在するものと考えられる。この包含層は中世以降に造成をかけられている。

3 縄文時代・弥生時代の遺物について (第15図~20図、写真11~17、表2~7、グラフ2~4) 縄文時代 (第15図、写真11)

包含層1からの出土が主なものである。量は少なく細片の為器種の同定は困難だが、黒色磨研で条痕を施すもの、口縁内側に沈線を施すものなどある。1浅鉢は胎土色調などから縄文土器としたが、周辺地域で同一の鉢を見ないので焼成不良の弥生中期壊の可能性も考えられる。突帯文深鉢土器は口縁の破片ばかりで形態は不明だが、破片数が多い。口縁から突帯が離れるものと、口縁と突帯を同時処理する物、突帯にキザミの無い物、突帯が退化したと思われる薄い粘土帯を貼り付けたものなどバリエーションがある。胸部破片には穿孔されているものがある。その他2重突帯文深鉢29が一点ある。5と併せて若干瀬戸内方面からの物資流入が認められる。

弥生時代 (第16図~20図、写真12~17)

前 期 溝状遺構1から前期の壺12が出土した。前期土器は胎土中の砂粒に大粒の物が多く入り、丸砂を含むものと角砂を含むものに分かれる傾向にある。器種構成は壺、甕、鉢、蓋の4種に分かれる。口縁は発達せずに上方に引き上げられる物から、発達して大きく外反する物まで見られる。口縁形態は大まかに端部丸い物、面を持つもの、面をもちキザミの入る物に分かれる。壺の段は、発達しない口縁直下より段が施される物から頸部下方より段の始まる物まである。また、段の代わりに沈線が施される物がある。胸部文様は二枚貝による綾杉文が多数を占めるが、ヘラによる施文も認められる。第16図11・13は鉢と思われる。鉢は破片からは個体の同定は難しく、口縁付近は甕として、底部は壺として分類された物が多いと思われる。甕、鉢は無文のものが圧倒的に多い。沈線は1条~5条までと多条がある。多条のものは中期として取り扱ったが数は少ない。1条の物から多条の物へ減少していく傾向がある(グラフ4)。今回の調査ではII様式を抽出することは出来なかった。前期の遺物量は包含層中2番目が多い。蓋は一点のみ確認された。

中期 胎土に大粒の砂粒は含まなくなり細砂粒を多く含むようになる。包含層中の出土量は最も多い。器種構成はバリエーションが豊富になるようで壺、甕、鉢、高坏が確認された。壺の装飾は口縁と頸部に集中している。口縁は直行して面を持つものと外反して端部が垂下する物に分かれる。端部の装飾は鋭い工具を使ったキザミと斜格子文が大半を占め、一部に円形浮文や、鋸歯文、波状文が認められる。頸部の装飾には突帯文が用いられており、キザミの入る物と入らない物に分かれる。頸部に指頭圧痕文帯をめぐらせる個体も數は少ないが認められる。甕は薄造りの無文甕が圧倒的に多い。口縁は水平方向に外反し、端部は丸く収まる物、面を持つもの、面をもちキザミの入る物が認められる。また、端部を上方に少し突出させる物も見られる。甕は基本的に頸部以下に装飾を施していないが、指頭圧痕文帯を持つもの3点、胴部に刺突を持つもの1点が確認された。鉢は明分化されて来ているようだが、若干前期的なものも残るようである。装飾は壺と同様な突帯や、指頭圧痕文帯が施されているものがある。中期に入って高坏が確認されるが、既に壠端部が発達しており、斜格子文の施されている物もある。他の文様は未確認である。脚の充填部は大きく、後期のような刺突痕跡は見られない。脚端部は一点のみ確認されたが、沈線で区画された斜格子文（綾杉の可能性あり）が施されていた。蓋は確認されなかった。全体的に後葉の物は極端に少ない。

後期 胎土に大きめの砂粒を含むものもあるが、全体的に細砂粒を含む。器種構成は壺、甕、高坏、低脚坏、器台、瓶型土器、紡錘車が確認された。壺、甕口縁は発達した端部に2~3条の沈線が入る物から明確な複合口縁に柳描直線文が施される物がある。その他、口縁が縮約され無文となる物、小型品などがあるが、端部に面を持つ物や折り返すもの、口縁が内傾する壺はない。また、外来形と思われる単純口縁のものがある。甕では、口縁の外反が強くなり、無文となるものはあるが、壺同様に端部に面を持つ物や折り返すものはない。高坏は内擣する坏部を持つ。脚面に穿孔された外来系の脚一点が確認された。低脚坏は少量出土する。器台は筒部が発達し器受部、脚台部に柳描直線文の施された物と、筒部が縮約し無文となる物がある。瓶型土器は突帯の廻らない大型品の破片が3点出土している。胴部転用の紡錘車が一点確認された。中期後葉に引き続きた後期前葉の土器は極端に少ない。

4 小 結

突帯文深鉢がまとまって出土するため、繩文晚期頃から弥生前期にかけて人の定着化が進んだと思われるが、弥生前期初頭の土器は明確な物が見当たらなかった。突帯文土器及び弥生前期甕の口縁キザミ目施率はきわめて低い。突帯文土器と弥生前期土器の共伴関係や連続性については不明である。Ⅱ様式（文献8）については、包含層中の出土と言うことと、石見のⅡ様式自体が不鮮明な為様式として捕らえられなかった。Ⅳ様式～Ⅴ様式～Iにかけての土器は極端に少ない。今回の調査では中期はⅢ様式の範疇で収まっている可能性もある。これには生活エリアの変化が考えられる。古八幡付近遺跡（文献76）で丘陵上に環濠をめぐらせた中期中葉～後期初頭にかけての集落が確認されているが、集落の遺物は環濠中に堆積したため、環濠より下方では当該期の遺物が出土しなかった。埋築遺跡周辺でも集落が移動した為に包含層に当該時期の遺物が混ざらなかった可能性を考えられる。

第3節 古代～中世・近世

1 中世の遺構について（第6図～14図、表2、グラフ1、写真7～10）

今回の調査では東西方向に低湿地が展開する舌状の扇状地上で掘立柱建物跡を中心とした2つの遺構群が検出された。調査は建物の建つ敷地の西側について行われ、敷地の東側については不明である。両調査区とも敷地内で柱穴の粗密が見られる。おそらく柱穴のあまりない場所は空き地として活用された空間と考えられる。また、II区は屋敷墓を伴う建物群と認識した。I区の遺構は大まかに南北軸に沿って忠実に建てられた一群（建物1～3）と、若干東に軸がぶれる一群（建物4、柱列1・2）がある。建物1～3は調査区南方へ伸びる可能性を持っており、おそらく同規模の建物を建て替えたものと思われるが、使用されている間尺や柱穴規模には変化が見られる。建物4は柱列1・2とほぼ同軸の為、おそらく柵列のようなもので区画された建物と思われる。II区の遺構は建物8を除き全体的に西へ軸を振っているが、I区と似た遺構の配置を見せる。II区も柱列3・4により区画された時期があり、軸がほぼ一致する建物5・9が対応すると思われる。

遺構の計測について

遺構の計測はメートル法を使用しているが、遺跡の表現方法として尺貫法も併用する。現在一尺の長さは30.3cmとされているが、建築時に使用した間尺の誤差や建築誤差など考慮し、一尺を30cmとして模式的に扱う。なお、本文、図版中共にPは柱穴の略称として使用する。

建物1 南北軸に正確に乗っている。建物は南に伸びる可能性のある総柱建物と思われる。北西隅に1間ほど張り出している。柱穴規模は30～60cm程度で、梁行きは7・8・9尺、桁行きは6・7.5・8・9尺の間尺を使用している。

建物2 東西南軸に正確に乗っている。建物は南に伸びる可能性があり、総柱建物、若しくは中抜け側柱建物と思われる。柱穴規模は40～60cmほどで、梁行きは7・8・8.5尺、桁行きは6・7・8尺の間尺を使用している。

建物3 南北軸に正確に乗っている。建物は南に伸びる可能性のある総柱建物と思われる。柱穴規模は30～50cmほどで、使用する間尺は8尺とほぼそろっており、梁行きは7.5・8・9尺、桁行きは8尺の間尺を使用している。

建物4 東西南軸から若干東に振って建てられている。西側の梁行き柱を検出できなかった為建物は西に伸びる可能性があると考えたが、柱列2が接する為ここで終わる建物の可能性が強い。中抜け側柱建物と思われる。柱穴規模は20～50cmほどで、梁行き、桁行き共7・7.5・8尺を使用している。

建物5 南北軸から西に振って建てられている。ほぼ正方形の中抜け側柱建物と思われる。P1・2間はトレンチのため柱穴の確認は出来なかったが、おそらく柱が存在したと考える。柱穴規模は20～50cmほどで、梁行き4・4.5・5.5・6尺、桁行きは4.5・5・5.5・6尺を使用している。外側の梁行き間で柱穴の小さな物が一つおきに見られる。P5より備前系と思われる甕胴部が出土した（写真19）。中近世遺物分類表の中世陶器9点と同一個体と思われる。時期は14～15世紀だろうか？ 遺構時期を表す上限である。

建物6 建物5と同様に南北軸から西に振って建てられている。ほぼ正方形の側柱建物と思われる。柱穴規模は30～50cmほどで、梁行き4～5尺、桁行きは6尺を使用している。平面規模は建物5の1/4である。調査当初、建物5と同規模の建物を想定していたが、その他の関連柱穴は確

認できなかった。梁行き間の間尺が伸びている。

建物7 建物5・6と同様に南北軸から西に振って建てられている。建物の南西隅で柱穴が検出されなかったのは、地形が傾斜しており、盛り土が流れた為と思われる。総柱建物の可能性が考えられる。35~40cmの柱穴規模を持ち、梁行き4~5尺、桁行きは9・10・11尺を使用している。桁行きは梁行きの倍の間尺を持つ。

建物8 東西方向に軸をとる側柱建物で、II区の北端に位置する。どちらかと言えばI区の建物に近い建て軸だが、間尺はII区の建物とそろう。柱穴規模は20~40cmほどで、梁行き4・6尺、桁行きは5尺を使用している。西側の梁は10尺あるが、P1とP7の間に柱が立っていた可能性もある。又、P3~5の距離とP9~10の距離は等しく、P4は別の遺構、もしくは補助材の可能性が考えられる。P7は柱穴底面に礎石が入っているが、これは西に向かって落ち込んでいるレキ層上に堆積した土がP7の基盤層になっている為、柱穴の沈下を防止する目的で入れられた物と思われる。

建物9 東西軸から西に振る掘り方のごく浅い建物で、柱列3・4と同軸をとる。柱穴規模は30~40cmで、梁行き9尺、桁行きは14尺を使用している。桁行き間に柱の入る可能性も考えたが遺構の検出は出来なかった。

建物10 南北軸から西へ振る建物で、建物9の建て軸と直交する。形態は建物7に類似しているが、建て替えの可能性は不明。柱穴規模は20~40cmで、梁行き7尺強、桁行きは7・8.5尺を使用している。建物7と同様、南西側は柱穴の検出が出来なかった。

柱列1・2 おそらく2列で一組となる性質のようで、南北軸より東に振れ、平行して走る柱列である。柱列間距離は12.2mあり、約4尺の柱列間で企画された物と思われる。柱穴規模は20~50cmで、柱間距離は7・8・9・10.5・11.5・12.5尺と幅がある。性格は不明だが、敷地を区画する柵列を想定する。建て替えの痕跡が認められない為、一時的な物だったようである。建物4が同軸で存在する。

柱列3・4 おそらく2列で一組となる性質のようで、南北軸より西に振れ、平行して走る柱列である。柱列間距離は10.9mあり、約3.6尺の柱列間で企画された物と思われる。柱穴規模は20~50cmで、柱間距離はおよそ8~9.5尺と、柱列1・2と比べて幅が少ない。性格は不明だが、柱列1・2同様敷地を区画する柵列を想定する。建て替えの痕跡が認められない為、柱列1・2と同様、一時的な物だったようである。柱列1・2と同等の性質が認められ、両者が並存した可能性も考えたが、柱間距離に差異が認められる為、明言できない。

土坑墓1 II区の西側で検出された土坑で長方形に掘り込まれていた。上坑の北隅に土師器壙一点、皿五点、中央に短刀一振りが埋納されていた為、墓坑と判断した。おそらく死者は北頭西顔屈脚で長方形の棺に納められ、短刀を胸上に安置し、土師器を土坑と棺の隙間に収めた後埋葬されたと考えられる。墓坑周辺ではあまり柱穴が検出されず建物も復元できなかった。

性格不明遺構 I区の土坑1~3は性格不明だが、土坑3で石組み囲いが確認され、井戸状遺構、若しくは木桶墓を想定した。II区で土坑墓1と共に検出された溝状遺構2は土坑墓と切りあい関係にあったが、分層出来無かった。しかし、出土した壙を比べると土坑墓資料より若干古い印象を受けた。溝状遺構3・4は浅く残っている。柱列3や建物8・9と軸が揃っており関係ありそうだが性格は不明である。屋根からの雨垂れによって出来たものかもしれないが明言は出来ない。

2 古代～中世・近世の遺物について（第21図・写真18～21）（表3・4・5・6、グラフ2）

古代 古墳時代から奈良時代の遺物は出土していない。平安時代に入ると8系切り柱状高台と9坏口縁の2点の土器が確認できる。瓦の中に繩目の残る瓦が一点ある。9と同形態の坏は波来浜遺跡でまとめて出土している。

中世 中世の器種構成は土師器坏、須恵器甕・鉢、陶器甕・擂鉢、貿易磁器である。磁器は龍泉窯系の青磁で占められており、中世前半の白磁が一点のみ混ざっている。青磁は大宰府磁器区分E期（13世紀前後～前半）とG期（14世紀初頭～14世紀後半？）の物に分かれる。口縁外面に沈線の施された土師器小皿19や格子目クタキの薄造り甕が出土している。中世須恵器の内、備前系擂鉢は15世紀前葉と思われる。その他の中世須恵器は産地時期等不明である。甕の他に小型品も含まれる。小型の甕若しくは、壺のような物を想定する。

土坑墓1の資料 土師器は相対的に比べて白っぽく薄造りの1（溝状遺構2出土）が精製された橙色の2～5と比べて古い印象を受ける。短刀は切っ先が欠損している可能性がある。刀長8寸ほど・平造り・刃先内反り等鎌倉初期から中期の特徴を備えているが、室町後期にもよく似たものが打たれている。

近世以降 18世紀に一つのまとまりが見られる。器種構成は磁器碗・皿・猪口、陶器甕・皿・擂鉢で、肥前系で占められている。染付けはの発色が深い優品が若干含まれるが、ほとんどは浅い発色の物である。高台の付く擂鉢は唐津系、若しくは出現期の石見焼のようだが現時点では不明。

19世紀以降に見られるいぶし瓦が出土しているが、この時期の他の遺物出土量は少ない。器種構成は瓦、陶器甕・壺・鉢・擂鉢がある。擂鉢に関しては石見焼だが、その他石見焼系統と思われるものの産地不明の陶器がある。

3 小 結

出土遺物より、中世の遺跡は大まかに13世紀前半ころと14世紀ころの2時期に分かれる。I区の建物で使用する間尺は5尺以下、9尺以上のものを含まず、梁・桁行き共にほぼ等しい間尺を使用しており、方位を意識した規格性の高い建物群である。逆にII区では5尺以下、9尺以上の間尺を使い、梁行きは縮小、桁行きは伸びる傾向にある。ここで重要なカギを握るのは建物5の存在である。柱穴出土遺物により、およそ14世紀～15世紀にかけての建物であると思われるが、使用間尺は4～6.5尺とI区より短い間尺を使い、梁行きと桁行きの規模が等しい両地区の中間的な建物である。I区がII区より古い様相を呈しているが、果たして、I区（～13世紀）→建物5（14～15世紀）→II区（15世紀～）と素直に移行するのか？今後の類例をまって検討したい。

第4章 まとめにかえて

今回の報告で使用したグラフの説明を行ないまとめてみる。

グラフ1は復元した中世遺構の柱間距離を表から起したもので、例えば梁1は建物1の梁行き間を表す。グラフではI区の遺構とII区の遺構で柱間距離の変化が現れている。

グラフ2は表6を基に遺跡から出土した分類可能遺物を時期・器種・層位ごとに集計した物である。縄文時代は遺物量が少ないが、突帯文深鉢の割合は飛び抜けて多い。一部は弥生前期に入るが、細分できなかった為、今回の報告ではあえて縄文土器とした。弥生前期に入ると全体の出土量が増える。主な器種構成は壺・甕になるが、壺は甕の1/2ほどの出土だった。鉢は部分による分類がうまくいかず、不確定な破片は壺底部と甕口縁に振り分けられている。弥生中期に入ると全体的な出土量は、ピークに達する。壺甕共に前期の出土量を上回るが、壺の割合が甕の3/4となる。後期に入ると全体の出土量は激減し、壺は甕の1/2を下回る。ただし、今回の調査では細片が多かったため、口縁のみで壺甕を明確に分類することは出来なかった。今後の周辺地域の様子と照らし合せて考えていく。なお、今回の調査では中期と後期の間に、IV様式が抜けている。

ここまでがおよそ包含層1の出土遺物であるが、層位ごとで見ると、包含層1層にあたる7層では縄文遺物は出土しなかった。しかし包含層最下層にあたる12層で弥生末期の土器が量的なまとまりをもって出土していることから、やはり包含層は弥生末期に動いていたことが確認できた。なにわ、遺物の出土量が充実しているのは最下層より1層上層にあたる11層で、全体を通じて出土量が多い。これらのことから裏付けるために、グラフ3を作成した。このグラフでは、分類不可能な特徴のない胴部破片を集計しており、グラフ2とは、補完関係にある。これにより、埋蔵遺跡における全遺物が分類・カウントされたことになる。グラフ3のデータベースでは色調・厚さ・砂粒の状態・凡その部位を集計したが、グラフでは砂粒の大小と部位を層位ごとに分けた。点数が多いので、グラフ2での集計誤差を補えると思うが、グラフ3で見ても11層が一番多く、次に、12層・10層の順で出土量は減少していく。ちなみに、砂粒の大小に分けたのは、前期の土器に砂粒の多い物が圧倒的に多く、縄文土器・弥生中期～末期は比較的砂粒が細かい事に着目して分けたもので、縄文・弥生後期～末期の出土量が少ないので、凡そ弥生前期と中期を比較出来ると考えたからである。グラフからは、全体の出土量は中期が多く、最下層における出土量も中期が多いと分る。

グラフ4は弥生前期の胴部沈線の本数を集計したもので、1条～や2条～などの不確定なデータをはずしても、沈線の数が増える物は相対的に少ない傾向にあることがわかった。

グラフ5は弥生土器の底部を底径と砂粒の大小ごとに集計したもので、凡そ前期と中期での底径の変化を表している。予想していたようには行かなかったが、ある程度のグループングは可能と思われる。今後の類例を増やして、器種の規格化の変化を捉えられるよう考えたい。

なお、グラフ2において、中世以降の遺物については出土点数が少なかった為うまくグラフで表現できなかったが、やはり土師器は消費量が多いことが確認できた。

今回の分類結果は遺跡の全体像を把握する意味において有意義だったが、周辺の状況との比較が出来ないので、今後の調査の叩き台として提示するに留める。過去の調査を洗い直すなど、今後類例を増やし、相対的に考察していきたいと考える。

今回の分類は調査員の力量不足のため細部に渡り不備な点がある事をお詫びし、今後の報告で随時訂正をおこなうこととする。

参考文献

調査及び報告書作成について以下の文献資料を参考とした

縄文時代

1	2000年3月	三田谷I遺跡 Vol.3	滋賀県中国地方建設局 鳥取県教育委員会
2	2000年2月	第10回 士器持考古学論文集「突帯文と遼東川」	士器持考古学論文集刊行会
3	2000年9月	第28回 山陰考古学研究集会 山陰の縄文時代遺跡	山陰考古学研究会
4	昭和58年12月	縄文時代の知識	渡辺 義
5	昭和59年9月	八葉立つ屋上記の丘 No.14 (山陰の縄文式土器一火腹正年)	島根県立八葉立つ屋上記の丘
6	1999年6月	中・西園田文時代研究の現状と課題	中国考古学研究会
7	1980年9月	松江考古第3号 鳥居島の縄文土器の研究一縄平を中心として一	火腹 正年

弥生時代

8	1992年5月	弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編	正岡 陸夫・松本 肇雄
9	2001年11月	第3回 西行者弥生・古墳・候時会 山陰地方における弥生時代前期の地 域相・資料編	西行者弥生・古墳・候時会
10	2000年2月	川向遺跡 多陀寺荒尾防砂事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	鳥取県浜田市木建築事務所 鳥取県浜田市教育委員会
11	2000年	古代古墳 第22集 中國における初期弥生墓誌の変容一縄石使用量 と例証の動向を中心として	小林 育樹
12	2000年11月	みやび第34号 文鏡・毒液型を削まない甕—山陰地域の近賀川式土器—	濱田 照光
13	1986年1月	弥生・文化の研究 7、弥生村落	今岡 忠・佐原 健
14	1989年5月	弥生・文化の研究 1、弥生とその環境	水井 昌文・須須 幸輔・ 金岡 恵・佐野 健
15	昭和52年3月	八葉立つ屋上記の丘研究紀要 I 弥生式土器集成	島根県立八葉立つ屋上記の丘資料館
16	昭和58年2月	日本農耕文化の生誕	村壁 芬介
17	2000年3月	遺跡出土の焼成粘土土器・焼成廃棄土器片からみた弥生土器の生産・供給形態	田崎 博之
18	1988年2月	日本考古学 4 集落と祭祀 繁縫集落	中元鏡之
19	2000年2月	第47回近畿文化財研究集会 弥生文化の成立—各地域における弥生文化成立期の具體性	近畿文化財研究会 (財)高知県文化財団高崎埋蔵文化財センター
20	1996年	山陰の初期弥生土器における纏足と地域関係	中川 実
21	2000年3月	青谷上寺地遺跡1・2・3	(財)鳥取県教育文化財団
22	1995年3月	古代 第九丸号 前南條土器出現	岡上交通省 鳥取工事事務所
23	平成12年3月	国立歴史民俗博物館研究報告第83集 出雲平原における弥生文化的成立過程	福尾恒一
24	2000年3月	秦木櫻山遺跡発掘調査報告	大山スカ村埋蔵文化財発掘調査会 島根県大山町教育委員会

中世一般

25	2000年9月	季刊考古学 中世考古学への招待	坂詰 秀一
26	1993年	古代文化研究所第1号 (戦国附見小笠原権力と地域社会構造—日本海(東洋)・西部地域における権力と江の川系社会の生産・流通—)	佐伯 伸哉
27	2000年2月	図解・日本の中世道路	小野 正敏
28	1991年11月	初期中世社会の研究	戸田 功美
29	1996年3月	芦戸千利子遺跡発掘調査報告Ⅸ 中世部分の築造跡	広島県芦戸千利子町巡回調査研究所編
30	1994年	鹿嶋奈良西御 鹿嶋奈良西御	島根県教育委員会 建設省浜田工事事務所
31	1993年	古市鎌倉城	浜田市教育委員会
32	1997年	横浪城跡 (土器土地区)	浜田市教育委員会
33	1998年	横浪城跡 (原井ヶ市地区)	浜田市教育委員会
34	1998年3月	七尾城跡・二七御上城跡	益田市教育委員会
35	1993年3月	山名氏義跡指定地発掘調査報告書	倉吉市教育委員会
36	昭和53年5月	日本史小百科 築城	有藤 忠
37	1993年7月	帝京大学山陰文化財研究所シンポジウム報告書 中世社会と城壁—考古学による世界史研究3—	石井 道・萩原一雄 編
38	1987年	山陰地域研究第1冊 中世の津江と都野氏	島根大学山陰地域研究総合センター 井上寛司
39	1991年	中臣断頭斬跡と佐助浜浜田連続予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅲ 船岡氏の跡跡	寺井 敏
40	1998年	濱石遺跡発掘調査報告書	仁摩郡教育委員会

中世遺構

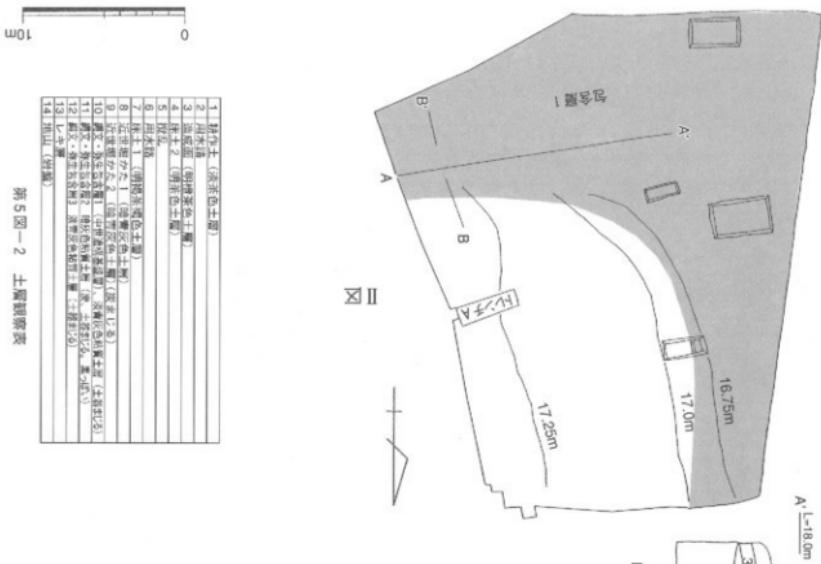
41	昭和61年4月	ふるさとの住まい	芸北町教育委員会
42	1983年4月	日本人のすまい 居居と生活の歴史	福浦和也・中山恵信
43	1996年1月	考古学による日本歴史 15 家族と住まい	前川 要
44	平成元年3月	紀要 Ⅱ 縱立柱建物群の開拓とその時代性	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 高橋・与右衛門
45	平成9年3月	紀要 Ⅲ 12世紀平家の圓面席縦立柱建物	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 松本 達謙
46	平成9年3月	紀要 Ⅳ 岩手県平泉町における近世縦立柱建物家について	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 村柴 直人
47	1998年2月 1998年3月	シンポジウム「縦立柱建物はいつまで残ったか」Ⅰ・Ⅱ 発表資料	奈良国文化財研究所

中世遺物

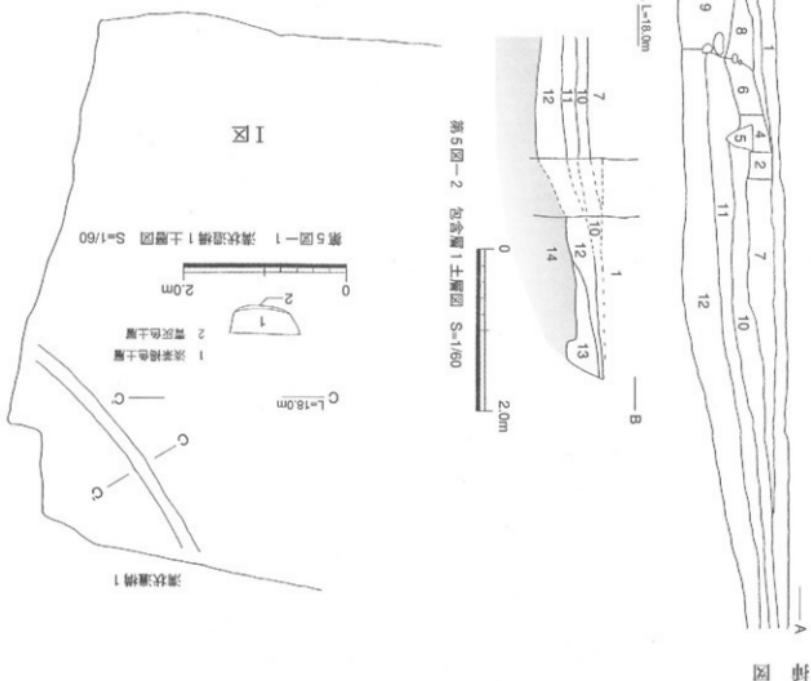
48	1998年8月	第26回山陰考古学研究集会 山陰における中世前期の貿易陶磁器	山陰考古学研究集会
49	1995年9月	刀劍鑄造薄本	水山 光幸
50	1995年12月	概説 中世の土器・陶器	中世土器研究会編
51	1995年12月	松江考古 I 編 8号	松江考古学講習会
52	1995年6月	大宰府陶器研究 一森田 仙氏道場集・追悼論文集	森川勉氏遺稿集・追悼集刊行会
53	1983年3月	大宰府茶器第1回 大宰府市文化財第7集	大宰府市教育委員会

54	1998年 貿易陶磁研究 No.18	日本貿易陶磁研究会
55	1992年12月 中京工藝研究所論	橋本 久和
56	1978年 九州歴史資料研究論集 第4 太宰府出土の輸入陶器について 一刑式分類と編年を中心として	横田賀次郎・森田 勤
57	1991年 古考古学ライブリー 60 順前鉄	喜多忠雄
近世		
58	1991年 「四谷三丁目道路」別冊 江戸道路輸出のやきもの分類(兼凡例)	東京消防庁 新宿区西三丁目道路調査團
59	2000年3月 志津見タム陶瓦埋藏文化財発掘調査報告書 玉谷たたら	滋賀県中和地方建設局 島根県頃瀬町教育委員会
60	昭和60年3月 須佐庭窯文	須佐町教育委員会
61	1993年12月 八幡空立風土記の丘 No.122,123(石見焼の調査例)	鳥取県立八幡空立風土記の丘
62	1994年1月 八幡空立風土記の丘 No.124 (近世赤瓦の技術系譜 久保田康)	鳥取県立八幡空立風土記の丘
63	2000年2月 伝承の工芸品 石見焼手引書	石見陶器工業協同組合
64	豪傑四百年 挿	平日 正典
65	2001年3月 石見焼伝統工芸調査報告書2 上府八反原窯跡(佐々木家跡)	国七交通連携浜田事務所 鳥取県教育委員会
66	2001年3月 石見焼伝統工芸調査報告書1 (坂田田遺跡・長尾坊跡)	国土交通省浜田工事事務所 鳥取県教育委員会
67	1992年3月 石見焼伝統工芸調査報告書 定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V	鳥取県教育委員会
68	1994年12月 古伊万里の文様	大瀬 康二
全般		
69	1999年3月 5.1地区遺跡群発掘調査報告書	高知県川本森林振興センター 鳥取県仁摩町教育委員会
70	1992年 鳥取県遺跡地図 II (足見跡)	鳥取県教育委員会
71	1997年 鳥取県中近世地図分布調査報告書 (第1集) 石見の城跡等	鳥取県教育委員会
市 内		
72	2000年3月 神主城跡・守町石造遺跡 古八幡付近道路・横路古跡	滋賀県浜田工事事務所 鳥取県教育委員会
73	昭和63年3月 大平山道路調査報告書	江津市教育委員会
74	1996年3月 鳥取文化財発掘調査報告書I (武成山・半山石碑・二宮C道路・久本萬葉跡)	浜田市教育委員会 鳥取県教育委員会
75	昭和63年3月 渡来民族発掘調査報告書I-1, 2次緊急調査報告書	鳥取県江津市
76	1992年12月 古八幡付近道路	鳥取県江津市教育委員会
77	1998年3月 内八幡付近道路Ⅲ	江津市教育委員会
78	昭和45年4月 江戸地方における埋蔵文化財について	江津市文化財研究会 新島 己基
79	2001年3月 忠臣櫻跡・業々原塙跡・上条道路・水)(一)(二) 神社跡(上条古墳)	国土交通省浜田工事事務所 鳥取県教育委員会
80	昭和47年1月 郡治治松	瀬川・津浦・郡治公民館
81	昭和57年6月 江津市立上巣 下巣 別荘	江津市
82	1999年5月 平成11年度根抵権放文化センター講演会「焼き物が語る石見の歴史」 —縄文・彌生から石見焼まで—	江津市教育委員会
83	1993年 寺内道路	鳥取県教育委員会
84	1992年 平成3年度 埋蔵文化財調査報告書	江津市教育委員会
85	1991年 江津市立東中学校改築事業に伴う 文化財調査I	江津市教育委員会
環 境		
86	1997年3月 鳥取県の自然と歴史? 稲作とその周辺 (改定版)	鳥取県立博物館
87	1999年5月 地球科学 第33巻3号	地学固体研究会
88	1984年 高地性紫茉と倭國大瀬・山陰海岸・江津砂丘地帯の地形	角田 清美
山 隆 道		
89	2000年3月 日本の古代道路を探す 庫令家のアウトバーン	中村 太一
90	2000年5月 季刊 古考古学 第46号 特集 (古代の道と考古学)	柏書房
91	1996年 日本考古学会協会 1996年度三重人会 シンボルム2 四面一箇内・七道の移転	日本考古学会協会三重県実行委員会
整 理 報 告 書 作 成		
92	2001年3月 前田道路 (第2稿文)	鳥取県八幡町教育委員会
93	1999年3月 松江市文化財調査報告書第78集 本庄地区自然個体発掘事業に伴う 松江北郷遺跡発掘調査報告書	松江市教育委員会 財团法人松江市教育文化振興事業団
94	1998年2月 講座 人文科学研究のための情報整理 「第4巻 イメージ処理論」	及川 審文・八村弘二郎
95	1998年10月 日本考古学会編著辞典	斎藤 忠
96	2001年3月 西川津浦跡	鳥取県立土木部河川課 鳥取県教育委員会
97	1985年11月 岩波講座 日本書古学 I 研究の方法	岩波書店
98	1998年7月 報告書制作ガイド	奈良国立文化財研究所内 埋蔵文化財古文書技術研究会
99	1996年12月 埋蔵文化財ニュース 83 報告書の体裁	奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財調査センター
100	1998年1月 埋蔵文化財ニュース 86 報告書の特徴	奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財調査センター
101	1999年1月 埋蔵文化財ニュース 91 報告書の回観	奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財調査センター
102	1998年 記載 文書 考古セミナーの考古学 一野外調査・室内整理・報告書 作成に関する講習会	(財)竹子然文化振興事業団埋蔵文化財センター 金子 駿介

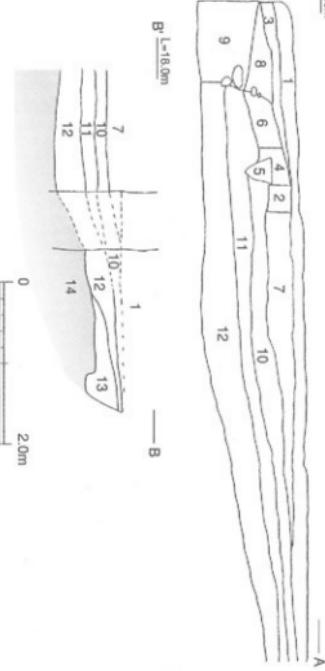
第5図 横文～赤生跡化遺構配図



第5図-2 土層剖面図

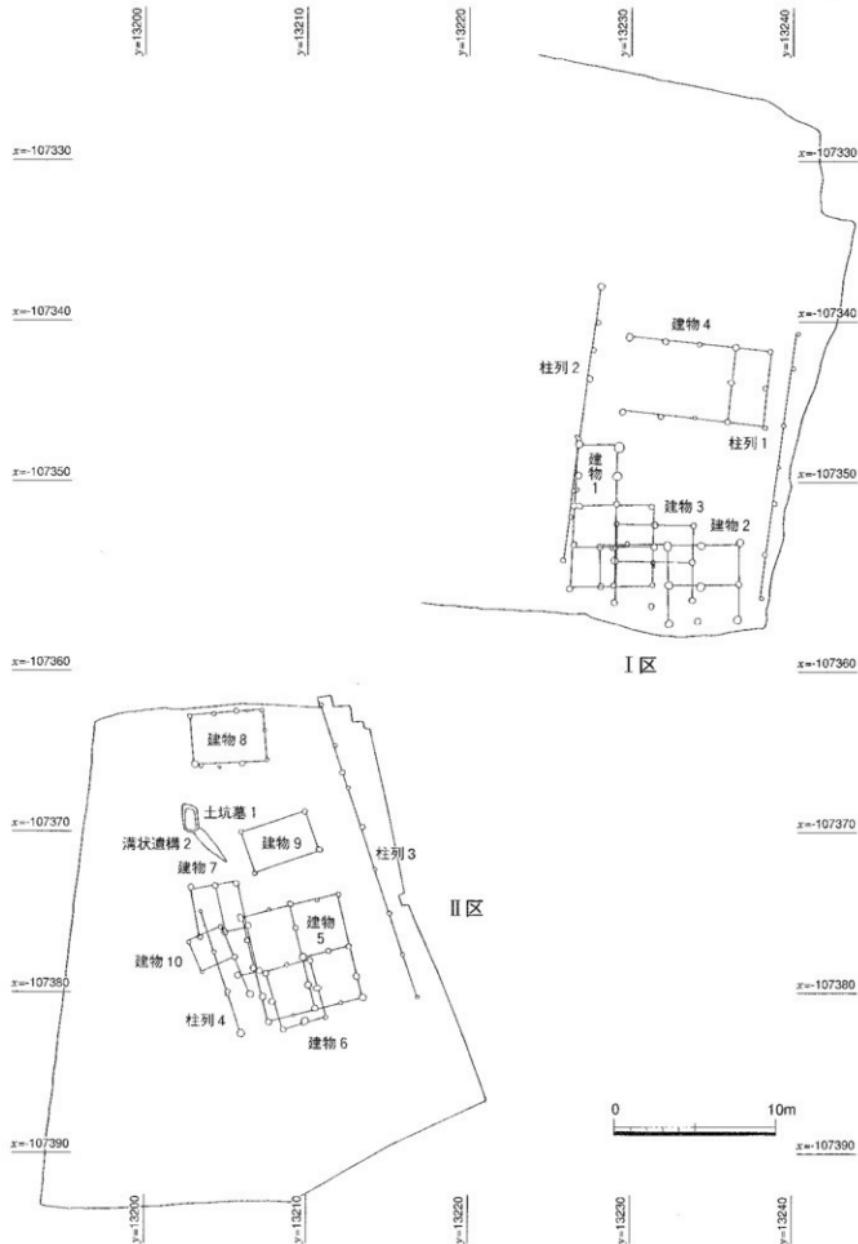


第5図-1 深茶色土層図 S=1/60



第5図

挿図

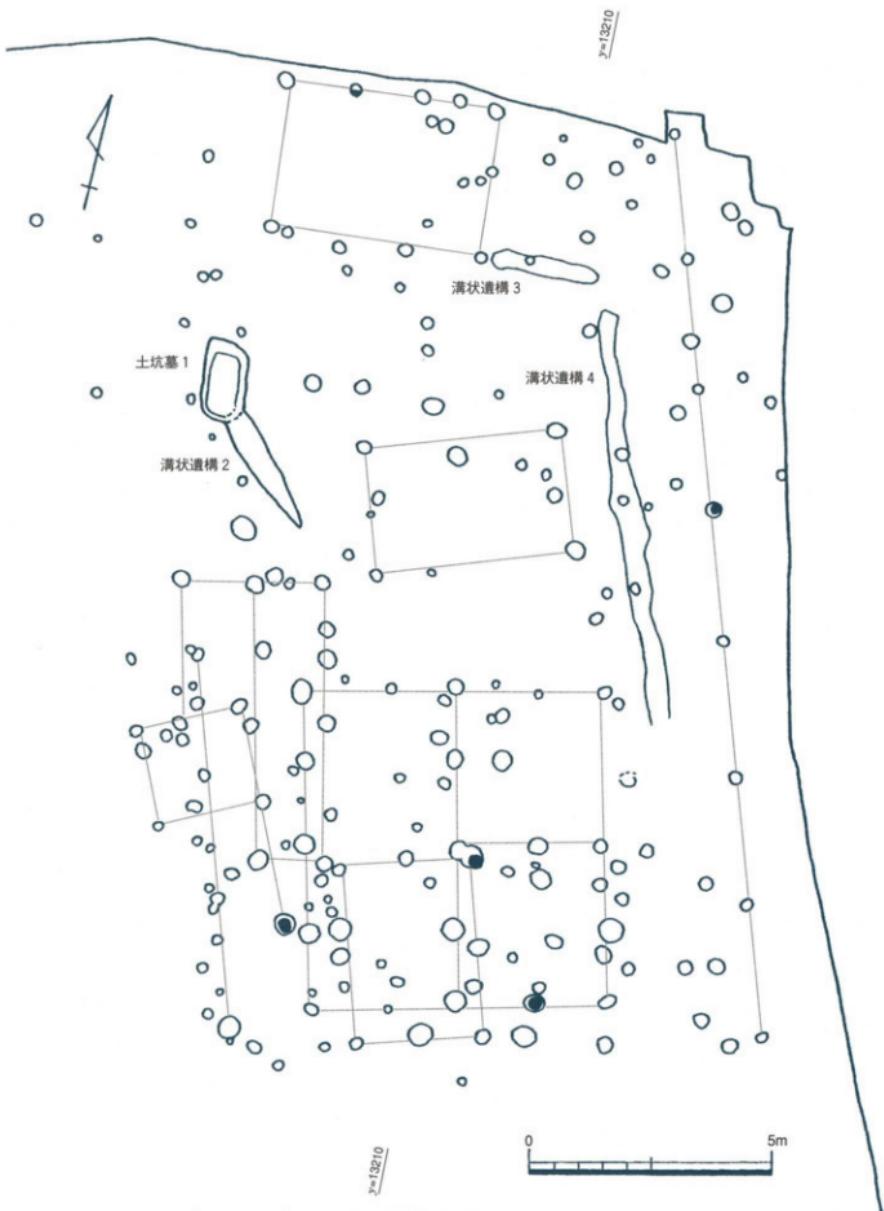


第6図 古代～中世・近世遺構配置図

挿図

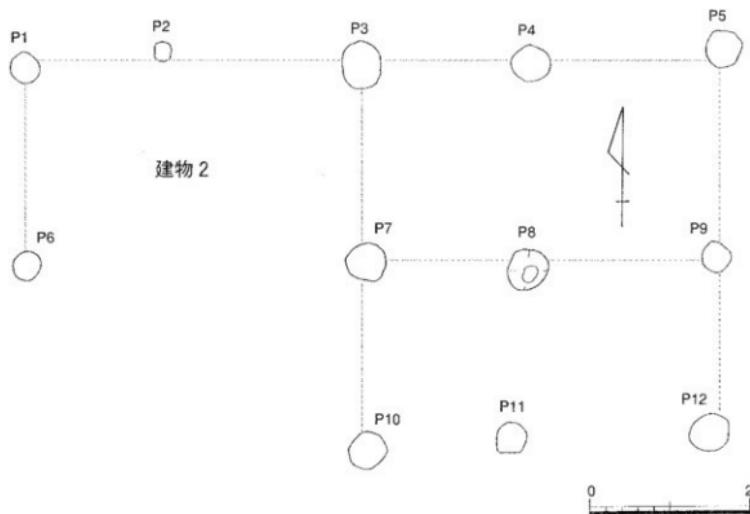
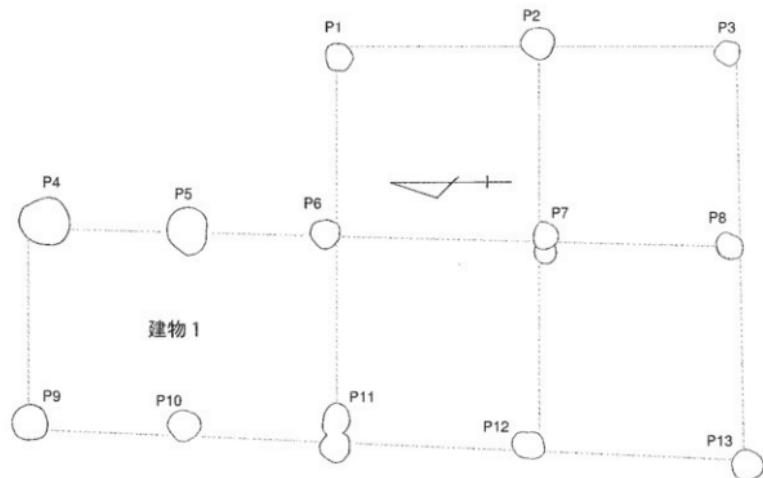


第7図 I区遺構検出状況 S=1/100

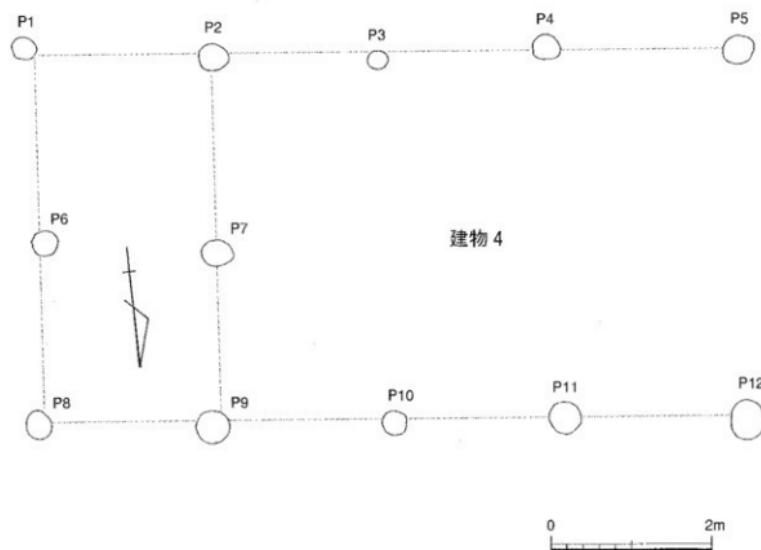
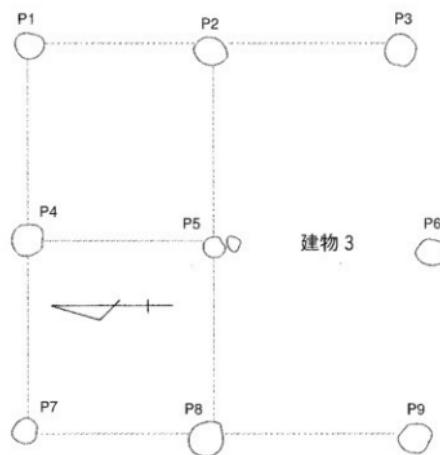


第8図 II区遺構検出状況 S=1/100

挿図

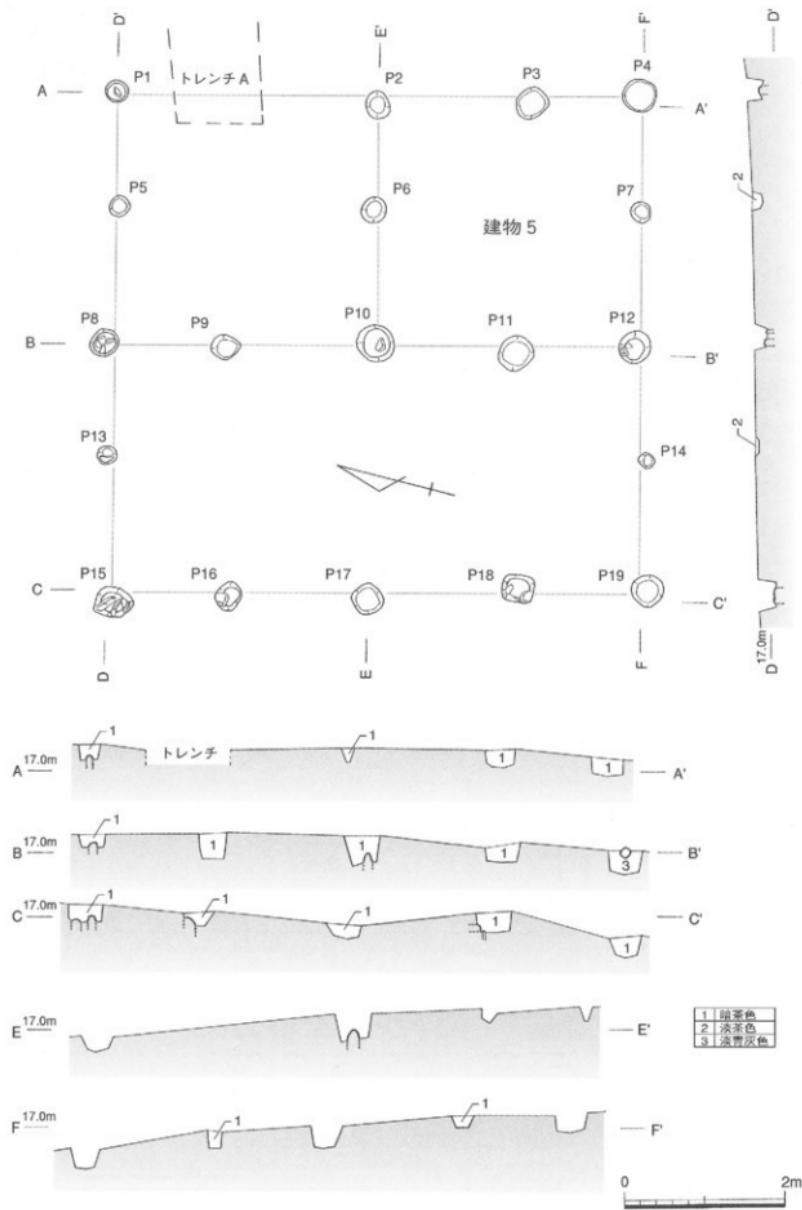


第9図 建物実測図1 S=1/60



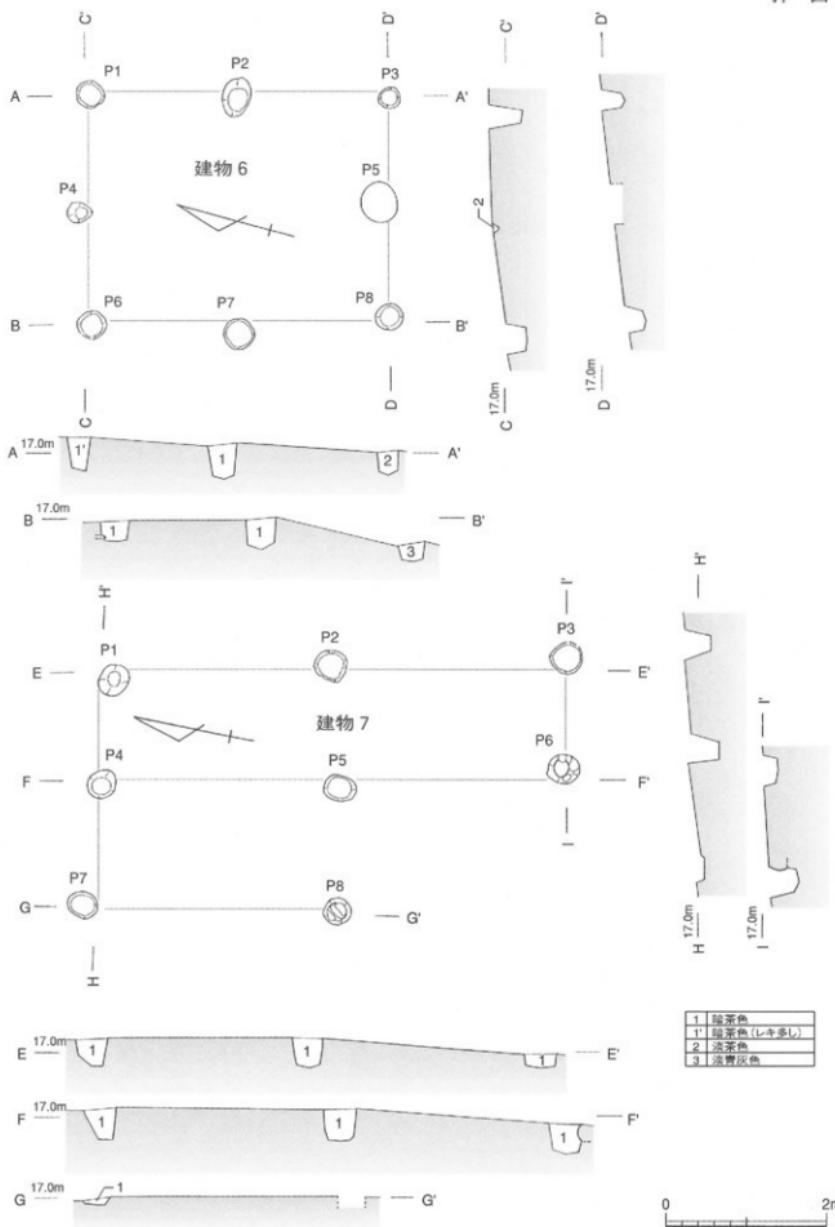
第10図 建物実測図 2 S=1/60

挿 図



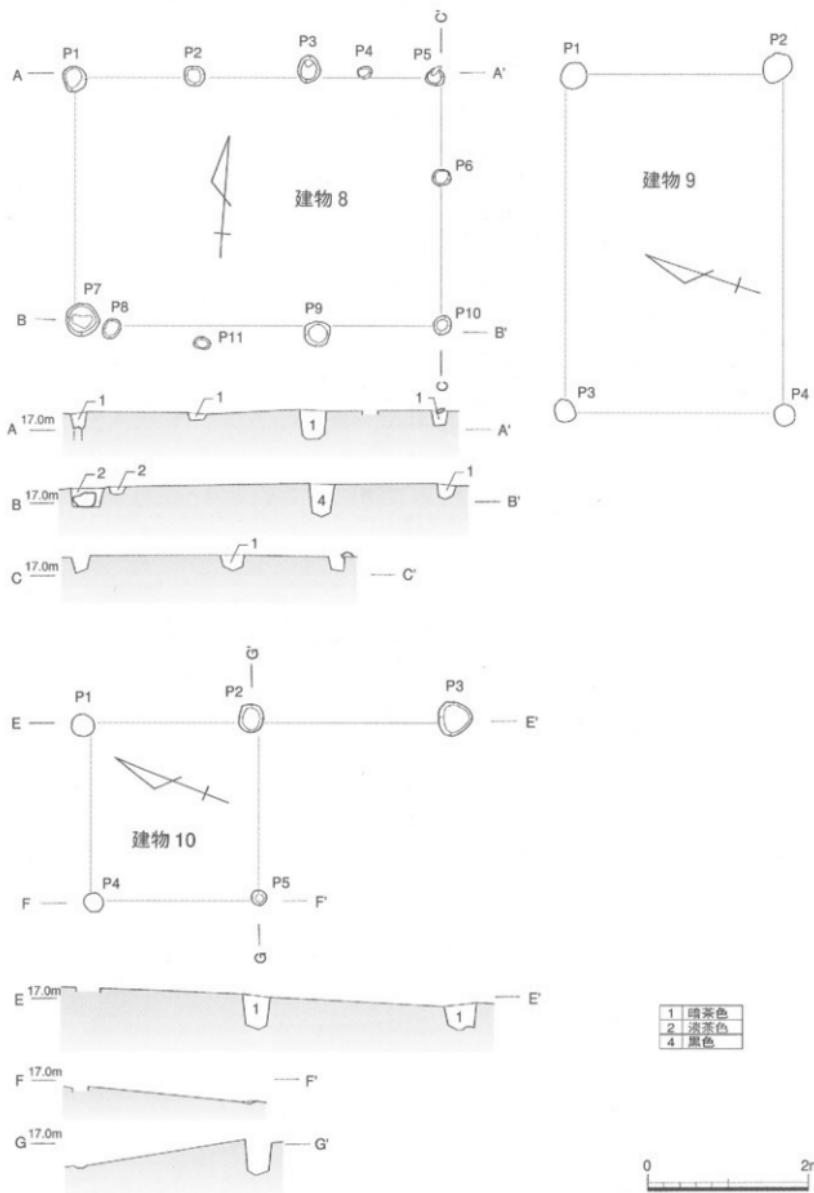
第11図 建物実測図 3 S=1/60

挿図



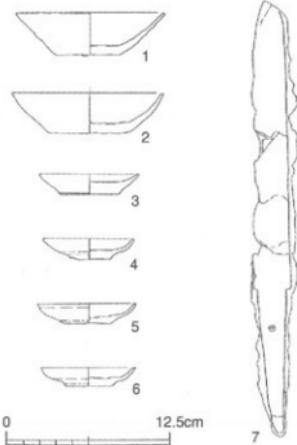
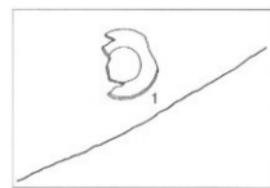
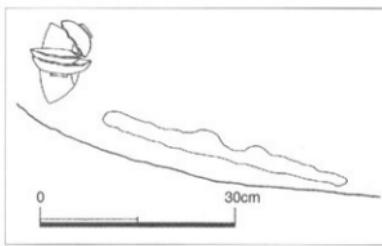
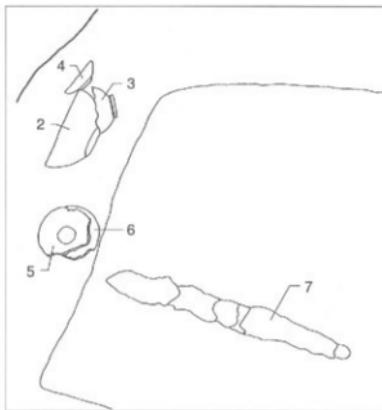
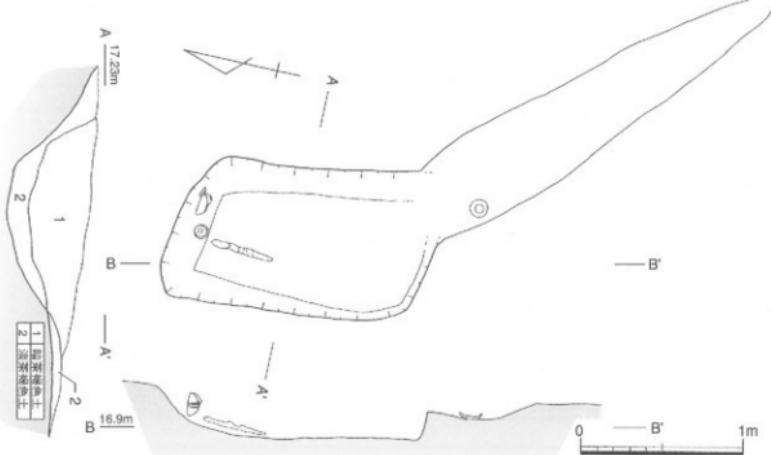
第12図 建物実測図 4 S=1/60

挿図



第13図 建物実測図 5 S=1/60

拵 図



第14図 土坑墓1 実測図 S=1/30

表2 遺構計測表

遺構計測表 (1)

遺構名		建物1						
主軸		N-3°-E						
柱穴配置		梁行			桁行			
規模 (m)		2間			4間			
		5.11			8.93			
柱間距離 (m)	柱間	P 4 - 9	P 1 - 6	P 6 - 11	P 1 - 2	P 2 - 3	P 4 - 5	P 5 - 6
	距離(m)	2.5	2.19	2.64	2.5	2.38	1.8	1.72
	柱間	P 2 - 7	P 7 - 12	P 3 - 8	P 6 - 7	P 7 - 8	P 9 - 10	P 10 - 11
	距離(m)	2.39	2.61	2.41	2.75	2.29	1.92	1.9
	柱間	P 8 - 13			P 11 - 12	P 12 - 13		
	距離(m)	2.7			2.4	2.71		
柱穴等	番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
	上面径(cm)	33×36	42×39	32×31	63×59	49×59	36×36	21×35
	底面標高(m)	—	—	—	—	—	—	—
	番号	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13	
	上面径(cm)	33×37	45×44	42×39	37×41	42×33	39×39	
	底面標高(m)	—	—	—	—	—		

遺構名		建物2						
主軸		N-90°-W						
柱穴配置		梁行			桁行			
規模 (m)		2間～			4間			
		4.76			8.7			
柱間距離 (m)	柱間	P 1 - 6	P 3 - 7	P 7 - 10	P 1 - 2	P 2 - 3	P 3 - 4	P 4 - 5
	距離(m)	2.45	2.43	2.34	1.72	2.47	2.1	2.41
	柱間	P 5 - 9	P 9 - 12		P 7 - 8	P 8 - 9		
	距離(m)	2.57	2.19		2.02	2.34		
	柱穴等	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
	上面径(cm)	36×39	20×24	48×59	49×45	46×46	34×36	50×47
	底面標高(m)	—	—	—	—	—	—	—
	番号	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12		
	上面径(cm)	51×54	37×39	48×47	37×43	53×46		
	底面標高(m)	—	—	—	—	—		

遺構名		建物3						
主軸		N-90°-W						
柱穴配置		梁行			桁行			
規模 (m)		2間～			2間			
		4.59			4.78			
柱間距離 (m)	柱間	P 1 - 2	P 2 - 3	P 4 - 5	P 7 - 8	P 1 - 4	P 4 - 7	P 2 - 5
	距離(m)	2.23	2.36	2.32	2.26	2.4	2.38	2.43
	柱間	P 8 - 9				P 5 - 8		
	距離(m)	2.59				2.38		
	柱穴等	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
	上面径(cm)	35×31	43×35	38×41	39×42	27×22	39×33	31×32
	底面標高(m)	—	—	—	—	—	—	—
	番号	P 8	P 9					
	上面径(cm)	42×48	42×38					
	底面標高(m)	—	—					

造構計測表 (2)

造構名		建物 4						
主軸		N-83.5°-W						
柱穴配置		梁行			桁行			
規模 (m)		2間			4間~ 8.85			
柱間距離 (m)	柱間	P1-6	P6-8	P2-7	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5
	距離(m)	2.41	2.26	2.43	2.34	2.05	2.08	2.38
	柱間	P7-9			P8-9	P9-10	P10-11	P11-12
	距離(m)	2.16			2.14	2.27	2.11	2.27
柱穴等	番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
	上面径(cm)	31×29	38×34	25×23	36×31	38×35	32×31	41×33
	底面標高(m)	—	—	—	—	—	—	—
	番号	P8	P9	P10	P11	P12		
	上面径(cm)	31×36	42×42	29×32	40×40	40×49		
	底面標高(m)	—	—	—	—	—		

造構名		建物 5						
主軸		N-15°-W						
柱穴配置		梁行			桁行			
規模 (m)		4間			4間			
柱間距離 (m)	柱間	P1-5	P5-8	P8-13	P13-15	P1-2	P2-3	P3-4
	距離(m)	1.4	1.67	1.38	1.82	3.21	1.92	1.33
	柱間	P2-6	P6-10	P4-7	P7-12	P9-10	P10-11	P11-12
	距離(m)	1.27	1.63	1.41	1.67	1.84	1.74	1.48
	柱間	P12-14	P14-19			P16-17	P17-18	P18-19
	距離(m)	1.4	1.63			1.69	1.86	1.61
柱穴等	番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
	上面径(cm)	29×28	30×35	40×42	42×43	26×26	31×32	24×27
	底面標高(m)	17.19	17.1	17.05	16.95	17.13	17.08	17
	番号	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15
	上面径(cm)	37×32	47×46	45×44	39×41	25×23	21×20	50×42
	底面標高(m)	16.92	17	16.87	16.74	17.16	16.74	16.95
	番号	P17	P18	P19				
	上面径(cm)	41×40	40×34	40×40				
	底面標高(m)	16.73	16.81	16.5				

造構名		建物 6						
主軸		N-15.5°-W						
柱穴配置		梁行			桁行			
規模 (m)		2間			2間			
柱間距離 (m)	柱間	P1-4	P4-6	P3-5	P1-2	P2-3	P6-7	P7-8
	距離(m)	1.46	1.4	1.28	1.83	1.86	1.79	1.88
	柱間	P5-8						
	距離(m)	1.43						
柱穴等	番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
	上面径(cm)	34×34	34×50	26×27	31×26	44×49	37×36	38×38
	底面標高(m)	16.8	16.67	16.72	17.08	—	16.73	16.62
	番号	P8						
	上面径(cm)	34×33						
	底面標高(m)	16.46						

遺構計測表 (3)

遺構名		建物 7						
主軸		N-12°-W						
柱穴配置		梁行				桁行		
規模 (m)		2間～				2間～		
柱間距離 (m)	柱間	P 1 - 4	P 4 - 7	P 3 - 6	P 1 - 2	P 2 - 3	P 4 - 5	P 5 - 6
	距離(m)	1.28	1.48	1.36	2.68	2.94	2.93	2.78
	柱間				P 7 - 8			
	距離(m)				3.16			
柱穴等	番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
	上面径(cm)	38×39	41×42	40×40	34×38	41×34	40×37	38×34
	底面標高(m)	16.83	16.81	16.81	16.73	16.7	16.54	16.91
	番号	P 8						
	上面径(cm)	35×34						
	底面標高(m)	—						

遺構名		建物 8						
主軸		N-86°-E						
柱穴配置		梁行				桁行		
規模 (m)		2間				4間		
柱間距離 (m)	柱間	P 1 - 7	P 5 - 6	P 6 - 10	P 1 - 2	P 2 - 3	P 3 - 4	P 4 - 5
	距離(m)	2.98	1.24	1.81	1.47	1.42	0.68	0.88
	柱間				P 7 - 11	P 11 - 9	P 9 - 10	
	距離(m)				1.46	1.46	1.51	
柱穴等	番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
	上面径(cm)	29×31	25×24	28×34	18×15	23×20	23×20	42×40
	底面標高(m)	17.04	17.13	16.88	—	17.05	17.06	16.95
	番号	P 8	P 9	P 10	P 11			
	上面径(cm)	22×26	33×31	21×25	21×15			
	底面標高(m)	17.11	16.83	17.03	—			

遺構名		建物 9						
主軸		N-72°-E						
柱穴配置		梁行				桁行		
規模 (m)		1間				1間		
柱間距離 (m)	柱間	P 1 - 2	P 3 - 4		P 1 - 3	P 2 - 4		
	距離(m)	2.52	2.72		4.12	4.26		
柱穴等	番号	P 1	P 2	P 3	P 4			
	上面径(cm)	32×33	36×40	24×29	25×27			
	底面標高(m)	—	—	—	—			

遺構名		建物10						
主軸		N-21°-W						
柱穴配置		梁行				桁行		
規模 (m)		1間～				2間～		
柱間距離 (m)	柱間	P 1 - 4	P 2 - 5		P 1 - 2	P 2 - 3	P 4 - 5	
	距離(m)	2.19	2.22		2.09	2.52	2.05	
柱穴等	番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5		
	上面径(cm)	27×27	30×35	41×42	24×24	19×19		
	底面標高(m)	—	16.62	16.6	—	16.71		

造構計測表 (4)

造構名		柱列 1						
主軸		N - 8° - E						
規模 (m)		6 間						
柱間距離 (m)		16.25						
柱穴等	柱間	P 1 - 2	P 2 - 3	P 3 - 4	P 4 - 5	P 5 - 6	P 6 - 7	
	距離(m)	2.15	3.5	2.5	2.2	3.2	2.7	
	番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
	上面径(cm)	22×20	28×24	25×25	20×20	30×30	33×30	24×24
	底面標高(m)	—	—	—	—	—	—	—

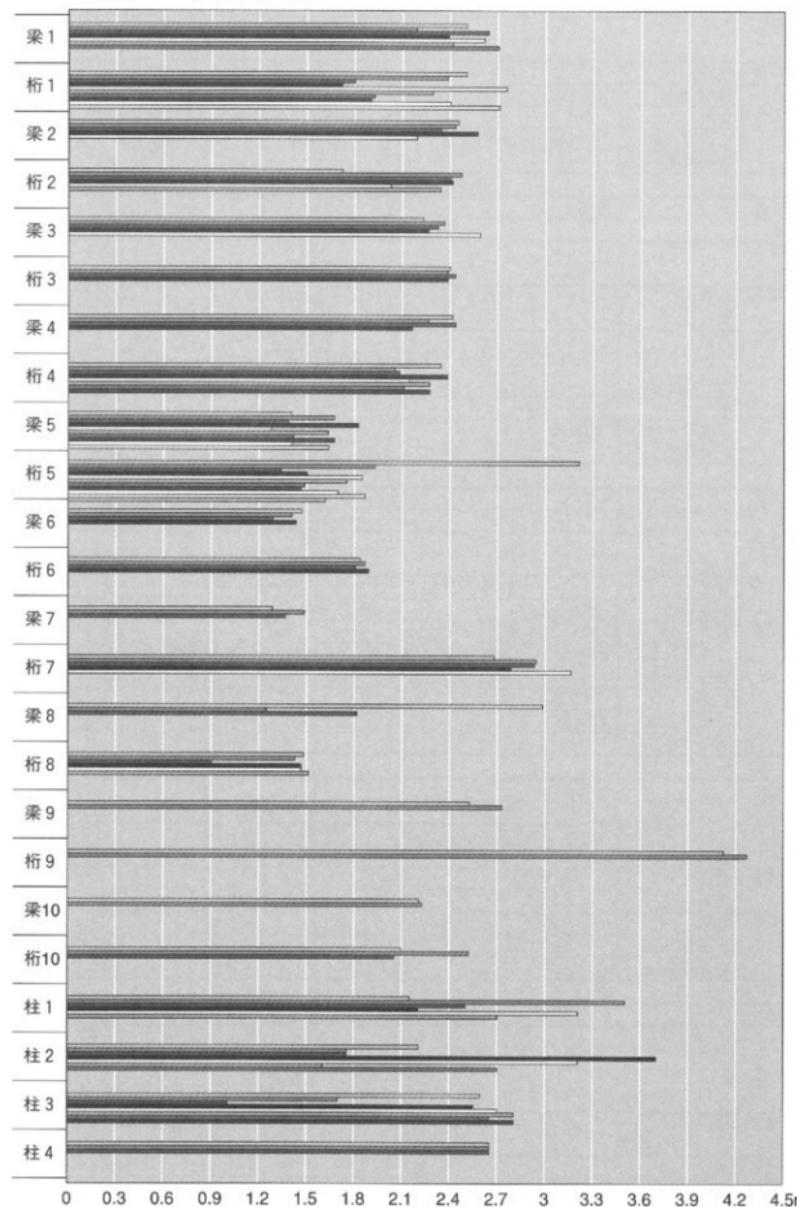
造構名		柱列 2						
主軸		N - 8° - E						
規模 (m)		7 間						
柱間距離 (m)		16.9						
柱穴等	柱間	P 1 - 2	P 2 - 3	P 3 - 4	P 4 - 5	P 5 - 6	P 6 - 7	P 7 - 8
	距離(m)	2.2	1.75	1.75	3.7	3.2	1.6	2.7
	番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
	上面径(cm)	40×42	28×30	28×30	36×38	50×27	30×48	28×26
	底面標高(m)	—	—	—	—	—	—	—
	番号	P 8						
	上面径(cm)	30×32						
	底面標高(m)	—						

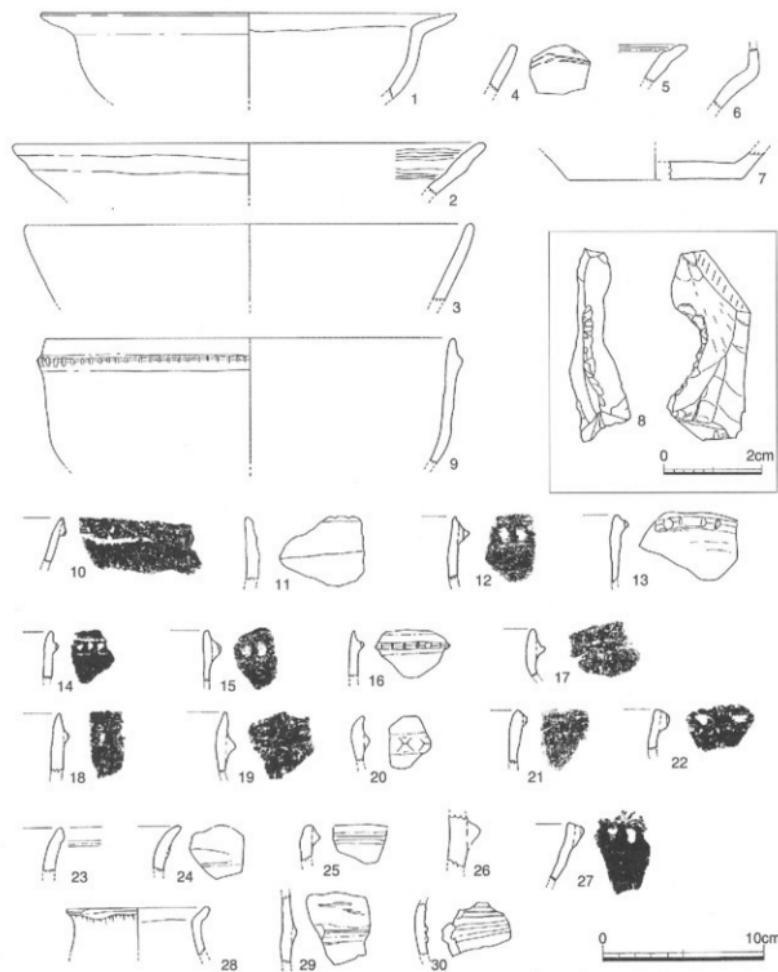
造構名		柱列 3						
主軸		N - 18° - W						
規模 (m)		8 間						
柱間距離 (m)		18.8						
柱穴等	柱間	P 1 - 2	P 2 - 3	P 3 - 4	P 4 - 5	P 5 - 6	P 6 - 7	P 7 - 8
	距離(m)	2.6	1.7	1	2.55	2.7	2.8	2.65
	番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 8
	上面径(cm)	25×23	25×27	30×38	20×26	30×34	21×28	28×28
	底面標高(m)	16.76	17.08	17.06	17.12	17.36	17.12	17.19
	番号	P 9						
	上面径(cm)	17×25						
	底面標高(m)	17.05						

造構名		柱列 4						
主軸		N - 18° - W						
規模 (m)		3 間						
柱間距離 (m)		7.9						
柱穴等	柱間	P 1 - 2	P 2 - 3	P 3 - 4				
	距離(m)	2.65	2.65	2.65				
	番号	P 1	P 2	P 3				P 4
	上面径(cm)	20×20	22×25	45×30				45×45
	底面標高(m)	—	16.76	16.65				16.34

造構名	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	主軸
土坑 1		1.6	1.4		N - 90° - W
土坑 2			2.1		N - 70° - W
土坑墓 1	上面	15.5	0.85	0.38	N
	底面	13.4	0.7		
溝状造構 1	上面	15.4	0.85	0.35	N - 38° - W
	底面		0.67		
溝状造構 2		2.7	0.58		N - 44° - W
溝状造構 3		2.13	0.4		N - 90° - W
溝状造構 4		8.6	0.62		N - 20° - W

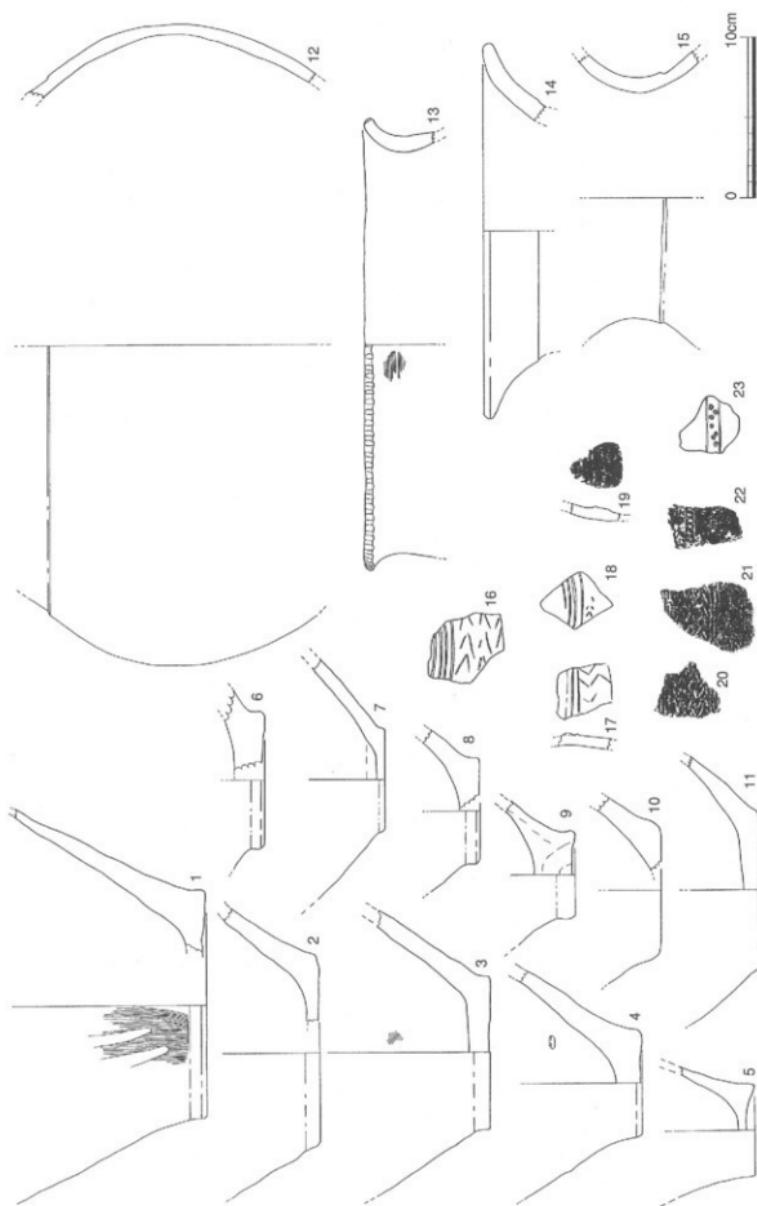
グラフ1 柱間距離一覧



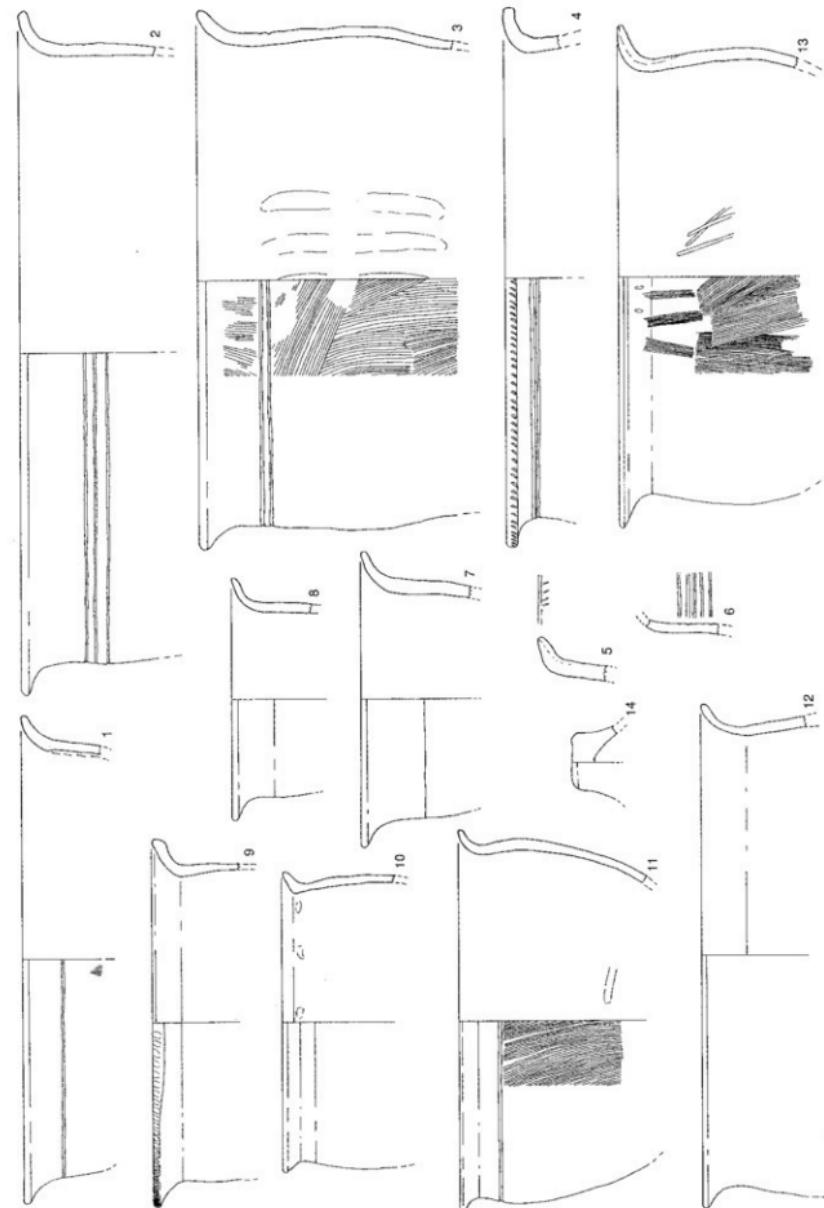


第15図 遺物実測図1 S=1/3

挿図

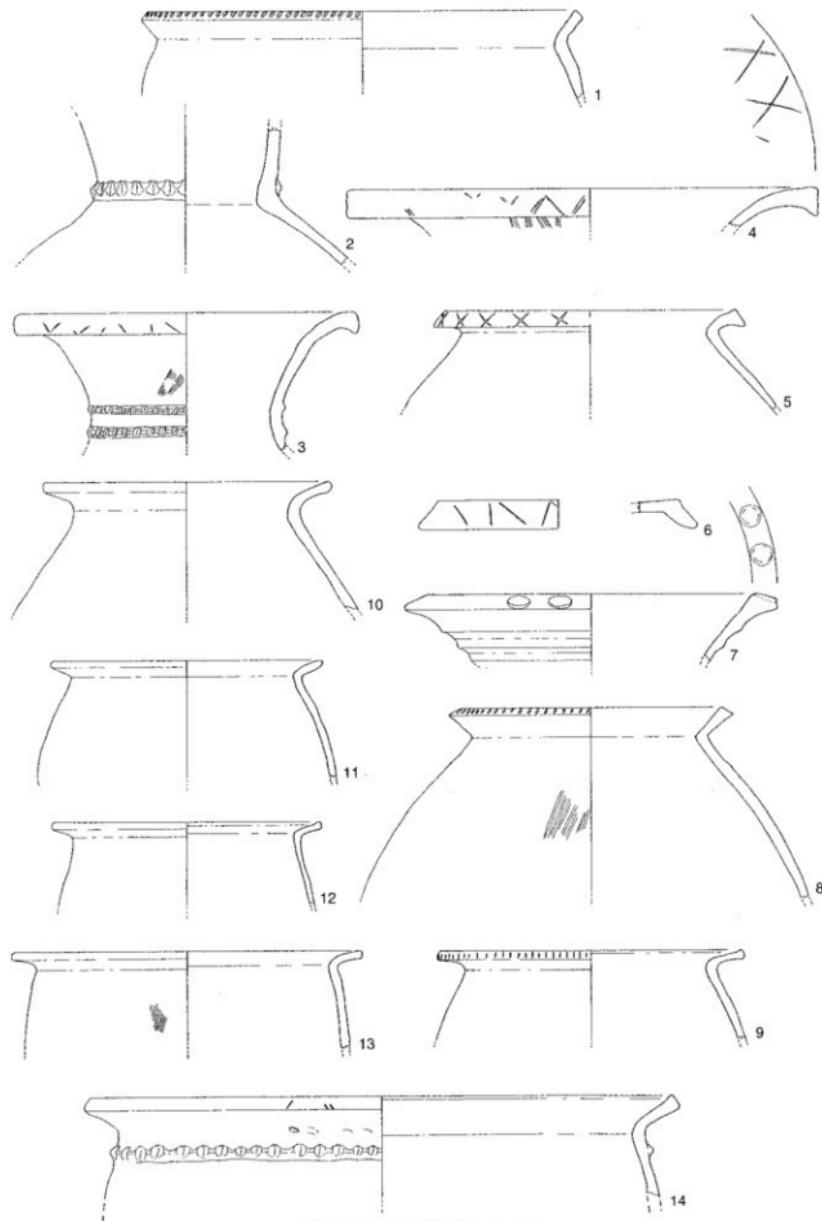


第16図 遺物実測図 2 S=1/3



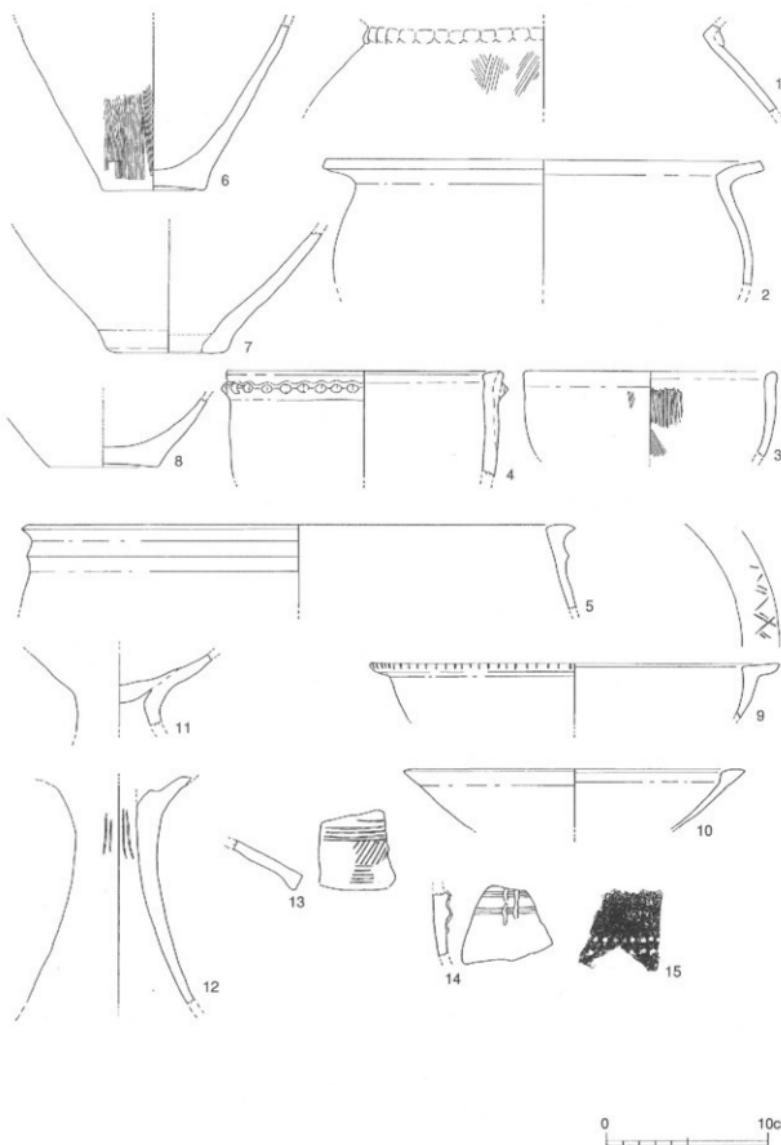
第17図 遺物実測図 3 S=1/3

挿図



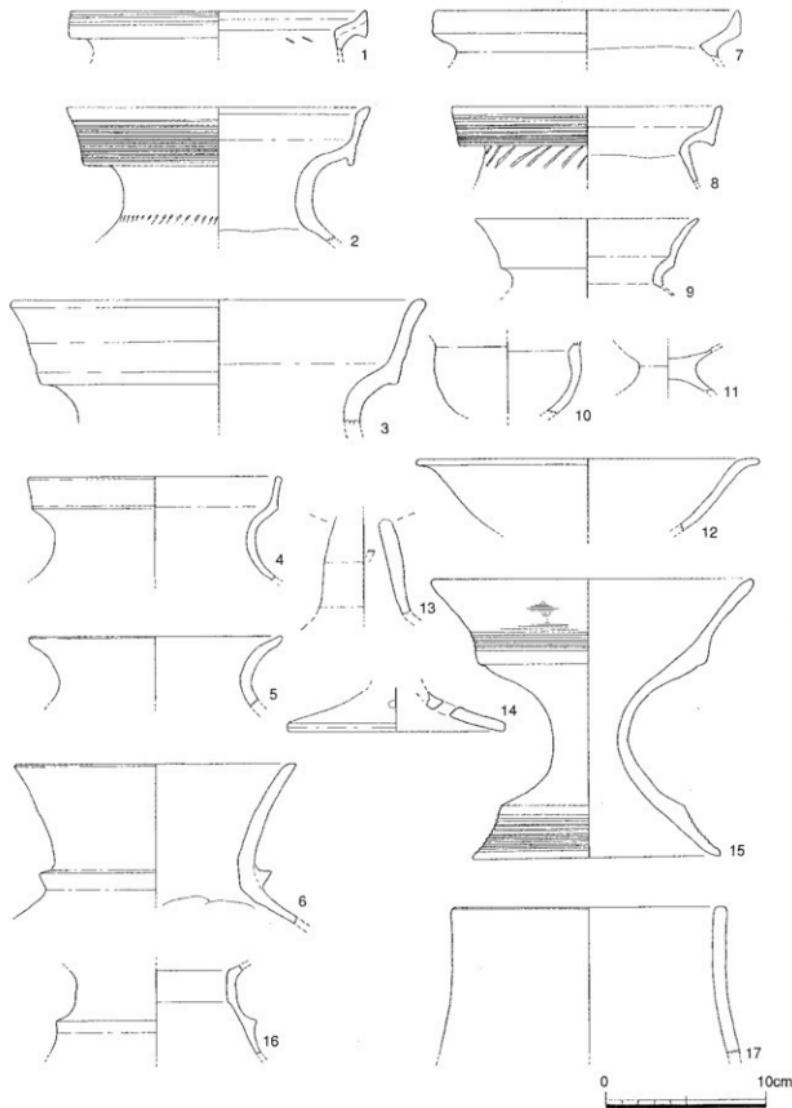
第18図 遺物実測図4 S=1/3

挿図

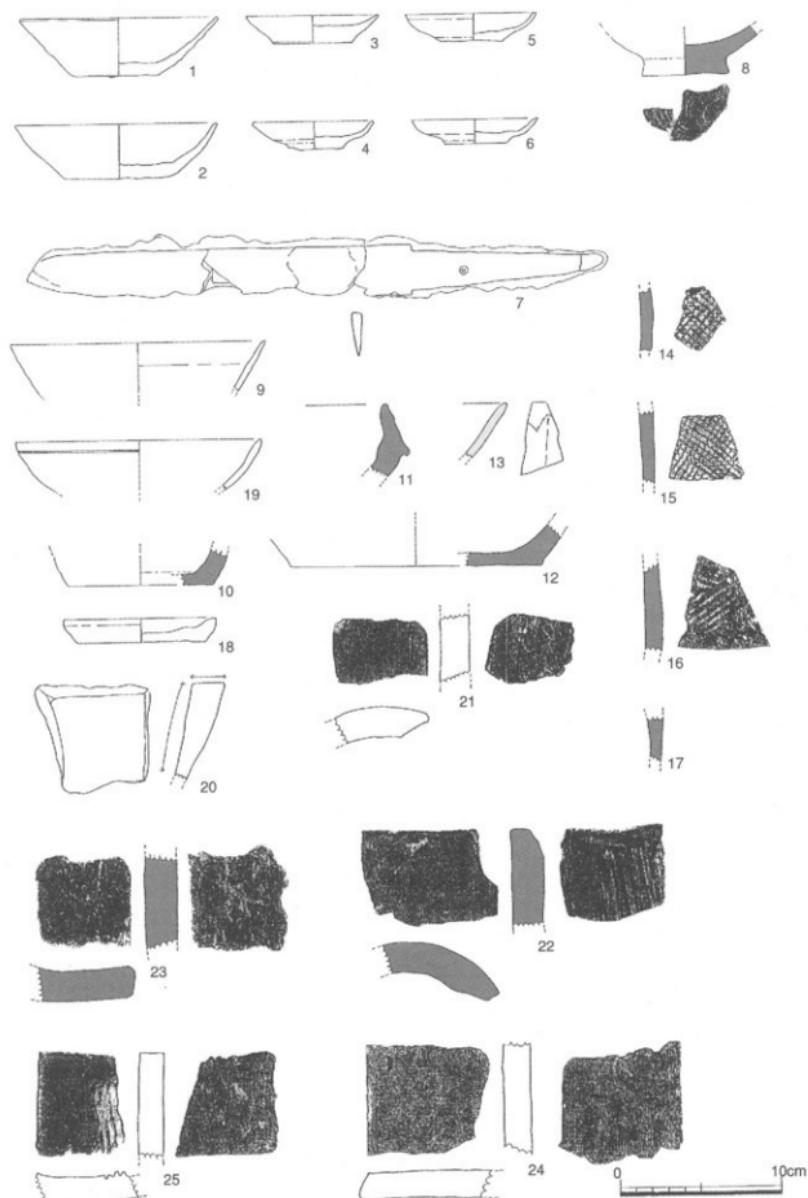


第19図 遺物実測図 5 S=1/3

挿図



第20図 遺物実測図 6 S=1/3



第21図 遺物実測図 S=1/3

表3 遺物観察表(1)

標因番号	器種	調壁	特徴	法面 底層 高さ (cm)	土	色調	焼成	備考	時代	時期
⑫-1	瓦片	外面：不明 内面：ミガキ	口縁：外反 内縁：無	27.4	相	黒色	無い	発生中期环の可能性	縄文	
⑫-2	瓦片 □縁	外縁：無 内縁：ミガキ	口縁外縁：弧いナメによる突起、□縁内縁：2条	28.4	やや粗	黒色	良好	岩田四種の可能性	縄文	晚期？
⑬-3	深鉢	外縁：ミガキ	内縁：ミガキ	27.3	相	黒色	無い		縄文	不明
⑭-4	鉢 □縁	外縁：ミガキ	□縁内縁：弧いナメによる突起、平行		やや粗	黒色	良好		縄文	不明
⑮-5	鉢	内縁：ミガキ	口縁内縁：テに沿る凸縁		相	白色砂粒を含む	白色砂粒 1ミリ程の 黑色	良好	縄文	不明
⑯-6	鉢	不明 (傷痕か?)	内縁：曲面と外縁		やや粗	外：黒茶色 内：黒茶色	やや不良	縄文	不明	
⑰-7	底盤	不明	底盤：立ち上がりの大きく外反	10.5	やや粗	白色砂粒を含む	白色砂粒 1ミリ程の 黑色	良好	縄文	不明
⑱-8	石器		直径：4.4cm		相	黒茶色	良好	2次加工のある石片	縄文？	
⑲-9	尖端文深鉢	不明	□縁より cm でがつたところに幅 8mm の突基、 V字キサギ	25	やや粗 2~3ミリの 砂粒を含む	黒茶色	やや不良	尖端ハクリ	縄文	晚期~
⑳-10	尖端文深鉢	不明	口縁部はりける		相	淡茶色	やや不良	尖端ハクリ	縄文	晚期~
㉑-11	尖端文深鉢	不明	口縁から 3mm 下がつたところに幅 20mm の突基 クリヤあり		やや粗	外：黒色 内：淡茶色	やや不良	尖端ハクリ	縄文	晚期~
㉒-12	尖端文深鉢	ナデカ?	内縁：ナデ 外縁：ナデ		相	外：淡茶色 内：淡茶色	良好		縄文	晚期~
㉓-13	尖端文深鉢	内縁：不明	口縁から 2~5mm 下がつて幅 mm の突基が つづいており、内縁部はりける		やや粗	暗茶色 (一部砂粒)	良好	口縁の形態不明	縄文	晚期~
㉔-14	尖端文深鉢		先端も口縁から 5mm 下がつたところに幅 5mm、 高さ 3mm の突基があり、内縁部はりける		相	淡茶色 内：淡茶色			縄文	晚期~
㉕-15	尖端文深鉢	不明	口縁から 2~5mm 下がつて幅 mm の突基、 高さ 3mm の突基があり		相	淡茶色	やや不良	端部にキサギ縁のもの	縄文	晚期~
㉖-16	尖端文深鉢	不明	内縁部はりける		相	淡茶色 (一部砂粒)	やや不良	端部にキサギ縁のもの	縄文	晚期~
㉗-17	尖端文深鉢	不明	先端も口縁から 5mm 下がつたところに幅 5mm、 高さ 3mm の突基があり、内縁部はりける		相	淡茶色 内：淡茶色	良好	外面上に付着物有り	縄文	
㉘-18	尖端文深鉢	不明 (ナデカ?)	口縁から 2~5mm 下がつたところに幅 5mm、 高さ 4mm の突基があり		相	淡茶色	良好		縄文	地相~
㉙-19	尖端文深鉢	不明	先端も口縁から 1.5mm 下がつて幅 1cm、 高さ 5mm の突基があり		相	淡茶色 (一部砂粒)	やや不良		縄文	晚期~
㉚-20	尖端文深鉢	不明	先端も口縁から 1cm 下がつて幅 1cm、高さ 5mm の突基があり		相	淡茶色	良好		縄文	地相~
㉛-21	尖端文深鉢	不明	口縁に幅 2cm、高さ 5mm の突基があり、 その上に、キサギ縁のようないし突起がある		やや粗	淡茶色 内：淡茶色	良好		縄文	地相~
㉜-22	尖端文深鉢	不明	口縁に接して幅 1cm、高さ 5mm の突基があり		相	淡茶色	不良	縄文	晚期~	
㉝-23	尖端文深鉢	不明	丸い突起が 7mm 下がつたところに強引な どうし突起がある。キサギ縁なし		やや粗	淡茶色	良好		縄文	地相~

標印番号	説明	調整	特徴	法面 （cm） 深さ	胎土	色調	焼成	備考	時代	時期
⑯-24	突帯文深鉢	不明	先端が落する脚から、3cm下がったところに筆 8mm、底さき5mmの脚をついて、5cm下に筆 丸い口縁から2mm下がったところに筆 高さ5mmの突起をついたと見なす	8mm、底さき5mmの突起をついたところに筆 幅2cm、高さ17mmの突起をつく、キサ目なし	口縁が落する脚から、3cm下がったところに筆 幅2cm、高さ17mmの突起をついたと見なす	明褐色	やや不良	先端削割のような治	調文	後期～
⑯-25	突帯文深鉢	不明	突起を含む	突起を含む	やや粗	淡青灰色	良好	突起の可塑性あり	調文	後期～
⑯-26	突帯文深鉢	不明	突起を含む	突起を含む	やや粗	淡青色	良好	突起の可塑性あり	調文	後期～
⑯-27	突帯文深鉢	不明	突起を含む	突起を含む	良好	外：褐色 内：灰白色	良好	突起文	後期～	
⑯-28	垂下口縁	口縁に何かってハケメ	口縁部折れ出すことで突帯を表現か？	2段目の突帯、幅1cm～5mm、高さ3mmの 突起をついて、キサ目なし	8.6	やや粗	やや不良	突帯文工器に伴うも	調文	後期～
⑯-29	突帯文深鉢	ミガキ	突起を含む	突起を含む	良好	中山日式か？	調文	後期～		
⑯-30	不明	不明	突起を含む	突起を含む	良好	淡青色	良好	先生	前期？	
⑰-1	垂 突起	外面：ハケメ、ナデ	平底	14	やや粗 砂を含む	2ミリ程の 淡青白色	良好	先生	前期	
⑰-2	垂 突起	不明	平底、もみ痕	12.5	粗 砂を多く含む	外：淡青白色 内：淡青色	良	先生	前期	
⑰-3	垂 突起	不明	平底	9.5	粗 砂を多く含む	内：淡青色	良好	内面にスス	先生	前期
⑰-4	垂 突起	不明	底面や窓む、底厚1cmのもみ痕、植物あと	6.4	粗 砂を含む	3ミリ程の砂を 暗褐色	良好	先生	前期	
⑰-5	垂 突起	不明	上げ窓	5.6	粗 砂を多く含む	淡青色	良好	先生	前期	
⑰-6	垂か鉢底部	ナデもしくはミガキ	上げ底、丁寧なつくり	7.7	粗、角砂多く含む	淡青色	良	先生	前期	
⑰-7	垂か鉢	不明	平底、立ち上がり強くなる	6	やや粗 砂を含む	外：淡青白色 内：灰白色	良好	先生	前期	
⑰-8	垂か鉢底部	外面：ミガキ	平底、立ち上がり強く曲曲	5.8	粗～ミリの角 砂を含む	外：暗褐色 内：暗褐色	良好	先生	前期	
⑰-9	垂 突起	不明	薄い平底、接着面あり	5	角砂を含む	外：淡青白色 内：淡青白色	良好	2次的に火をうける	先生	前期
⑰-10	垂か鉢	不明	平底、底径5mmのひび割れあり	6.5	粗～ミリ以上の中 砂を多く含む	淡青灰色	やや不良	先生	前期	
⑰-11	垂か鉢	不明	平底一部窓し、3mmほど角砂多く含む	9.4	3ミリ程の砂粒を多 く含む	外：淡黄色 内：淡黄色	良好	先生	前期	
⑰-12	垂 脚部	外底：ミガキ 内底：不明	明確な陥れも○	粗多く含む	5mm以上の中 砂を含む	淡青色 内：淡青色	やや不良	満状遺構出土	先生	前期
⑰-13	垂 口縁	外面：横ハケメ	口縁部に字のキサミ	27.5	やや粗 砂を含む	褐色	やや不良	先生	前期？	
⑰-14	垂 口縁	ナデもしくはミガキ	口縁近く外反し、底下から落がつく	22.8	粗 砂を含む	淡青白色	良	先生	前期	
⑰-15	垂 突起	不明	頭部3分の2でつがったところに脚がある	粗 砂を含む	淡青色	良好	先生	前期		
⑰-16	垂 脚部	外側：不明 内底：ナデもしくはミガキ	くし状工具による4段の沈擦文と鉛形文 突起の下にくし状工具による4段の沈擦文と鉛形文	粗多く含む	淡青色 内：淡青色	良好	突帯文工器に伴うも	先生	前期	
⑰-17	垂 脚部	不明	3段の弱い沈擦線が文をほどこす	砂を含む	外：淡青色	良好	突帯文工器に伴うも	先生	前期	
⑰-18	垂 脚部	不明	やや粗	内：淡青色	良好	肩部か？	先生	前期		

表3 遺物観察表(2)

検査番号	器種	調整	特徴	法線(度数(cm))		触土	色調	焼成	備考	時代	時期
				口徑	底径						
③-19	不明 脊部 不明		幅1cm高さ3mmの削りだし突堤の2条の浅い沈縫による3mm以上の沈縫に区画された二枚貝文	粗 丸秒を多く含む やや粗 砂粒を含む	淡褐色 淡青白色	良好	良好	弱生	前周		
③-20	董 脊部 不明		二枚貝文	やや粗 砂粒を含む	淡青白色	良好	相合度あり	弱生	前周		
③-21	董 脊部 不明		二枚貝による3mmの沈縫に区画された継形文	やや粗 砂粒を含む	淡青白色	良好	相合度あり	弱生	前周		
③-22	董 脊部 ナデカ?		くし状工具による沈縫に区画された刻文	やや粗 砂粒を含む	淡青白色	良好	弱生	前周			
③-23	董 脊部 不明		2条の沈縫に区画された幅3mmの竹巻文	粗 丸秒を多く含む	淡青白色	良好	弱生	前周			
③-1	董 口縫	外面：ハケメ 内面：不明 (ハツリ)	口縫端部：丸、沈縫1条	粗 丸秒を多く含む 相 丸秒を多く含む	淡青白色 淡青白色	良好	口縫外壁：スス付端	弱生	前周		
③-2	董 口縫	外底：不明 内底：堀れ (ハツリ)	口縫端部：丸、沈縫3条	粗 丸秒を多く含む 相 丸秒を多く含む	淡青白色 淡青白色	良好	内底スス付端	弱生	前周		
③-3	董 口縫	外面：口縫から沈縫まで 薄ハラ、丸、沈縫2条 内面：ハケメ (ハツリ)	口縫端部：丸、沈縫2条	粗 丸秒を多く含む 相 丸秒を多く含む	内：淡青色 内：淡青色	良好	外底スス付端	弱生	前周		
③-4	董 口縫	不明	口縫端部：底をもう二枚貝による刻突・沈	粗 丸秒を含む 4.4リットルの丸秒を多く含む	淡青白色 淡青白色	良好	董の可溶性あり	弱生	前周		
③-5	董 口縫	内底：堀れ (ハツリ)	口縫端部：丸、キサミ	粗 丸秒を多く含む 相 丸秒を多く含む	内：淡青色 内：淡青色	良好	外底スス付端	弱生	前周		
③-6	董 脊部	不明、ナデカ?	5条の沈縫	粗 丸秒を多く含む 相 丸秒を多く含む	淡青白色 淡青白色	良好	外底スス付端	弱生	前周		
③-7	董 口縫	不明	口縫端部：丸、段をもつ	粗 丸秒を多く含む 相 丸秒を多く含む	淡青白色 淡青白色	良好	2次的に火をうけた	弱生	前周		
③-8	董 口縫	不明	口縫端部：丸	粗 丸秒を多く含む 相 丸秒を多く含む	内：淡青色 内：淡青色	良好	内底スス付端か?	弱生	前周		
③-9	董 口縫	不明	口縫端部：キサミ	粗 丸秒を多く含む 相 丸秒を多く含む	内：淡青色 内：淡青色	良好	口縫の崩み不均一	弱生	前周		
③-10	董 口縫	不明	口縫端部：丸、外反	粗 丸秒を多く含む 相 丸秒を多く含む	淡青色 淡青色	良好	外底黒ほん	弱生	前周		
③-11	董 口縫	内底：ハケメ (ハツリ)	口縫端部：丸、沈縫1条	粗 丸秒を多く含む 相 丸秒を多く含む	淡青色 淡青色	良好	外底が水の中に火をうけた	弱生	前周		
③-12	董 口縫	不明	口縫端部：少し外反	粗 丸秒を多く含む 相 丸秒を多く含む	淡青白色 (ぞうげ色) 淡青白色	やや不良	弱生	前周			
③-13	林 口縫	内底：ハケメ (ハツリ)	口縫端部：丸、凹凸外反 強引ナデカ?	丸秒を多く含む 相 丸秒を多く含む	淡青白色 淡青白色	良好	ハツリ、外底黒ほん	弱生	前周		
③-14	ふた つまみ	不明	ぼたん状のつまみ、つめ痕あり (径3.5cm)	やや粗 角秒含む	淡青白色	やや不良 んあり	上端邵平たい、黒ほ	弱生	前周		
④-1	盛口型	(内底 ミガキか?)あり	矧く凹凸する口縫端部に面をもつ、キサミ目	小砂粒を含む	淡褐色	やや不良 ゆがみ有り	弱生	中周			
④-2	董 突頭	不明	董 唐庄文帶	やや粗 2.3リットルの外縫：淡青白色	良好	シーフラで焼い作り	弱生	中周			
④-3	董 口縫	内底：不明	口縫下し面もつ、面に墨書きなどびす、強引ナデカ?	砂粒を含む	明褐色	弱生	弱生	中周			

種別番号	名種	調査	特徴	生長(㎝)		土壌	色調	焼成	備考	時代	時期
				平均	最高						
③-4	巻 口縁	外面：巻ハケメ 内面：不明	重下口縁、面をもつ2条の唇瓣文、口縹上に	26.1		砂	小砂粒多く含む 外：淡黄白色	良		弥生	中期
③-5	巻 口縁	内面：ミカタガ?	面に2瓣の唇瓣文、内面：巻ハケメ			砂	小砂粒多く含む 外：淡黄白色	良		弥生	中期
③-6	巻 口縁	横ナデ	外形：不明	重下口縁に唇瓣文、口縹上間に	16.8	砂	小砂粒多、含 内：淡黄灰色	良		弥生	中期
③-7	巻 口縁	不明	外形：ハケメ ナデ	唇瓣文：先端面をもつ、円形唇文一列、 唇瓣ナデにより火災第3巻に	22	砂	やや暗 赤褐色土色豊 く含む	やや不良		弥生	中期
③-8	巻 口縁	内面：ナデ ナテ	粗く屈曲する口縫唇部に面をもつ、キザミ	18		砂	小砂粒多く含む 外：淡黄白色	良		弥生	中期
③-9	巻 口縁	不明	口縫唇部：粗く屈曲した面をもつ、キザミ	20.6		砂	あまり砂粒を含 外：淡黄白色	良		弥生	中期
③-10	巻 口縁	不明	粗く屈曲した面をもつ	17.4		砂	小砂粒を少含む 内：淡黄白色	良		弥生	中期
③-11	巻 口縁	不明	粗く屈曲する口縫唇部を多くわざめる、唇部 滑つくり	8.4		砂	小砂粒多く含む 内：淡黄白色	良	ススベノ(外縁)	弥生	中期
③-12	巻 口縁	不明	粗く屈曲する口縫唇部をつぶみがく、面をもつ、 全体に滑つくり	21.4		砂	小砂粒多く含む 内：淡黄白色	良	日様式?	弥生	中期
③-13	巻 口縁	内面：巻ハケメ、獨 つよいナデ	口縫唇部：粗く屈曲した面をもつ、唇部：厚 く重く外反し、唇部に面をもつ、唇部少 く1cm下がったところに唇瓣文有	36		砂	やや粗 少量の砂粒 を含む	良		弥生	中期
③-14	巻 口縁	不明	口縫唇部：粗く屈曲したところに唇瓣文有			砂	淡黄白色	良		弥生	中期
④-1	巻か巻 口縲	外面：ハケメ 内面：不明	頭部に指捺压痕文有			砂	やや粗 少量の砂粒を含 内：黑色	良		弥生	中期
④-2	鉢 口縲	内面：博ハケメ	粗く屈曲する唇部に面をもつ、薄いつ (リ)	26.8		砂	あまり砂粒を含 内：淡黄白色	良		弥生	中期
④-3	鉢 口縲	内面：ナデ ナテ	口縫唇部：強いため丸くおさめる	15		砂	あまり砂粒を含 内：蓝色	良		弥生	中期
④-4	鉢 口縲	内面：ミカタ	粗く屈曲する口縫唇部：強いため丸くおさめる 内面：ミカタ	16.4		砂	小砂粒含む 内：淡黄白色 (やや粗)	良好	胎土	弥生	中期
④-5	鉢 口縲	不明	粗く屈曲する口縫唇部：強いため丸くおさめる 内面：博ハケメ	33.2		砂	約2mm以上 の砂粒含む 内：淡黄白色	良好		弥生	中期
④-6	巻 底部	外面：巻ハケメ 内面：ナデ ナテ	粗く屈曲する口縫唇部：強いため丸くおさめる 上げ底	6.4		砂	やや粗 少量の砂粒を含 内：淡黄白色	良	外縁に黒ほん	弥生	中期
④-7	巻か斜底部	不明	底部立ち上がりて屈曲	7.4		砂	やや粗 少量の砂粒を含 内：淡黄白色	良	楕圓形	弥生	中期
④-8	巻か斜底部	不明	上げ底	6.5		砂	やや粗 少量の砂粒を含 内：淡黄白色	良		弥生	中期
④-9	高环 壁部	ナデもしくはミカタ	水平に張り出た口縫上面に面をもつ、2瓣	25.2		砂	少量の砂粒を含 内：淡黄白色	良		弥生	中期
④-10	高环 壁部	不明	斜面に張り出た口縫上面に面をもつ、2瓣	19.4		砂	やや粗 少量の砂粒を含 内：淡黄白色	良		弥生	中期
④-11	高环 兼基部	不明	五瓣唇部7cmの接合部、尖頂部に輪穴六穴	5.2		砂	少量の砂粒を含 内：淡黄白色	良好		弥生	中期
④-12	高环 脚部	外面：不明 里面：收口	水平に張り出た口縫上面に面をもつ、2瓣	25.2		砂	やや粗 少量の砂粒を含 内：淡黄白色	やや不良		弥生	中期
④-13	高环 壁部	不明	脚部垂下面をもつ、外面に「ク」字形唇瓣文 で区画され、内面に唇瓣文有	2.2		砂	少量の砂粒を含 内：淡黄白色	良好		弥生	中期
④-14	垂 脚部	不明	2条の列点文	2.4		砂	少量の砂粒を含 内：淡黄白色	良好		弥生	中期
④-15	脚部	おそらくナデ	2条の列点文			砂	多く含む 内：淡黄白色 (内側に黒 ほん)	良好		弥生	中期

表3 遺物観察表(3)

種別番号	部種	形態	特徴	口径 (cm) 底径 (cm)	胎土	色調	焼成	備考	時代	時期	
20-1	釜 口縁 外底：不明	外底：不明	発達した口縁部で、2条以上の内縁文	18.4	やや粗 い砂質を含む 陶器	深茶色	良好	先生	後期		
20-2	釜 口縁 外底：不明 内底：へたり目	外底：不明	複合口縁下方に深窓、底部内面に墨つぶつ 複合口縁下方に深窓、底部内面に墨つぶつ へたり目	18.7	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色	良好	先生	後期		
20-3	釜 口縁 内底：へたり目	複合口縁	複合口縁ゆる外底に深窓多く含まれる	25.5	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色	良好	大型品 先生	後期		
20-4	釜 口縁 内底：へたり目	複合口縁	複合口縁ゆる外底に深窓多く含まれる 発達しない複合口縁、底部先端丸く	15.5	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色	良好	大型品 先生	後期		
20-5	釜 口縁 内底：へたり目	複合口縁	やわらかく外反する複合口縁、底部先端丸く わかる	15.7	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色	良好	大型品 先生	後期		
20-6	釜 口縁 内底：へたり目	複合口縁	底立ち込み半周に複数窓多くおさめる、頭 部に脱落等はりつけ	17.3	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色	良好	大型品 先生	後期		
20-7	釜 口縁 内底：へたり目	複合口縁	複合口縁底立ち上げる 複合口縁外底に複数窓、頭部二枚目によ る刻文	18.6	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色～深褐色	良好	大型品 先生	後期		
20-8	釜 口縁 内底：へたり目	複合口縁	複合口縁外底に複数窓、頭部二枚目によ る刻文	16.8	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色～深褐色	良好	大型品 先生	後期		
20-9	釜 口縁 内底：へたり目	複合口縁	発達した複合口縁外反し、底部先端丸 く	11.1	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色～深褐色	良好	先生	後期		
20-10	釜 内底： ミガキ	小型精製品	内底：ミガキ	1.5	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色～深褐色	良好	先生	後期		
20-11	低脚杯	不明	脚低く聞く	1.5	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色	やや不良	先生	後期		
20-12	高脚 杯足	不明	脚高部外反する、杯底膨張しない	15.3	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色	良好	先生	後期		
20-13	高脚 脚部	外底：不明 内底：しまく目	脚部中央膨らむ、内底工具痕	13.4	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色	良好	脚内系？ 先生	後期		
20-14	調味器	ナマコ	ナマコもしくはミガキ	やや底膨らむ、脚部底をつ やや底膨らむ、脚部底をつ	19.7	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色～深褐色（一部黒は る有り）	良好	脚内系 先生	後期	
20-15	調味器合	不明	外底：不明	19.7	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色～深褐色（一部黒は る有り）	良好	脚内系 先生	後期		
20-16	鉢型器合	不明	外底：不明	9	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色	良好	受け皿の可視性も 先生	末期		
20-17	鉢型土器	ナマコ	口縁底部丸く、おさめ突起はつかない	16.0	粗 い砂質を含む 陶器	深茶色	良好	先生	末期		
21-1	土器器 口縁	白色系、うりげん上げ	白色系、うりげん上げ	12.1	粗 い砂質を含む 陶器	深黄色	良	21-2～5より古い マメシ	中世	13世紀？	
21-2	土器器 口縁	白 い砂質を含む 陶器	精製された胎土	11.8	粗 い砂質を含む 陶器	深褐色	やや不良	中世	13世紀		
21-3	土器器 口縁	白 い砂質を含む 陶器	精製された胎土	8.2	粗 い砂質を含む 陶器	深褐色	やや不良	中世	13世紀		
21-4	土器器 口縁	白 い砂質を含む 陶器	精製された胎土	7.3	粗 い砂質を含む 陶器	深褐色	やや不良	中世	13世紀		
21-5	土器器 口縁	白 い砂質を含む 陶器	精製された胎土	8	粗 い砂質を含む 陶器	深褐色	やや不良	SK01-2-2と同じ胎 土。陶器骨格にある。 平安時代～	中世	13世紀	
21-6	土器器 口縁	白 い砂質を含む 陶器	精製された胎土	7.8	粗 い砂質を含む 陶器	深褐色	やや不良	中世	13世紀		
21-8	須恵器 高台	不明 （脚部）	脚部：脚部先端丸く	5.2	粗 い砂質を含む 陶器	深褐色	不良	1997年 中世	中世		
21-9	須恵器 环	不明 （脚部）	口縁：重ね絞き底	15.6	粗 い砂質を含む 陶器	深褐色～深灰褐色	良好	1997年 中世	中世		
21-10	須恵器 环	不明 （脚部）	口縁：脚部	9	粗 い砂質を含む 陶器	深褐色	良好	1997年 中世	中世		

検出番号	器種	調整	特徴	法量(cm)		胎土	色調	焼成	備考	時代	時期
				口径	底径						
21-11	すり鉢	陶器：ナデ 使用時に より滑つてならむが なりからか	②-12.5cm- 17.4	密	外：暗茶赤色 青灰色	良好	偏白系	13-14 世紀			
21-12	すり鉢	陶器内面：使用によ り滑つてならむが なりからか	②-12.5cm- 17.4	密	白色の砂粒が目立つ 青灰色	良好	偏白系	中世			
21-13	青磁碗			密	暗青灰色	良好	龍泉窯系	中世			
21-14	須恵器 壺	陶器外腹：子口タガキ 陶器内腹：子口タガキ		密	灰色	良好		中世			
21-15	須恵器 壺	陶器外腹：子口タガキ 陶器内腹：ケズリ底、輪、蓋ナデ		密	灰色	良好		中世			
21-16	須恵器 壺	陶器外腹：平タガキ 陶器内腹：ケズリ底、輪、蓋ナデ		密	灰色	良好		中世			
21-17	須恵器 壺	ナデ	内：自然釉	密	灰色	良好	器種不明	おもく4世			
21-18	土器器 Ⅲ 不明		口縁：短く立ち上がる	7.7	密	深茶色	良好		中世		
21-19	土器器 外 不明		口縁：外腹に光腹	15.2	密	深茶色	良好		中世		
21-20	褐石	使用による磨滅	幅：5cm以上、高：5cm以上			乳白色		荒砥用			不明
21-21	焼し瓦	外面：ナデ 内面：焼紅泥はげ付	丸瓦		密	外：黒灰褐色 内面：灰白色	やや不良		近世	14世紀 以降	
21-22	須恵器 瓦	内腹：棒状工具によ るたたき、ナデ	丸瓦		密	暗灰色	良好		中世か？	不明	
21-23	須恵器 瓦	器内ナデタガキ後、 内面：未調整（焼れ せるか）	平瓦		密	暗灰色	良好		中世か？	不明	
21-24	焼し瓦	外腹：ナデ（裏側背面 側面、裏方ナデ等） 内腹：露れていいる、墨 分のナデ（くいわ）	平瓦		密	外：黒褐色 内面：灰白色	やや不良		近世	14世紀 以降	
21-25	焼し瓦	内腹：露れていいる、墨 分のナデ（くいわ） 内腹：ナデ（くいわ）	平瓦（溝止めの跡目）		密	外：深灰色 内腹：暗灰色	やや不良	カーボンの現象が強い	近世	19世紀 以降	

検出番号	種類	油り込み	部分			寸法	目印孔	区形態	重ね	備考
			底	中心	縁					
21-7	短刀	平油り	内底り(若干)	一般形・生中心、裏尻 不明	不明	平縁 24cm~	11.8cm	3.1cm	径5mm 3.3cm 6mm	刃先欠ける

表4 遺物分類表

(1) 縄文

時期	器種	部位	特徴1	特徴2	計
前期	深鉢	口縁	キザミ	突帯文キザミ 突帯文ハクリ	2 1
			丸	突帯文キザミ 薄い突帯文	9 2
			細片		1
			先縁る	突帯文キザミ 薄い突帯文 突帯文キザミなし	3 2 2
			突帯接する	重け字突帯文 突帯文キザミ 突帯文退化 薄い突帯文 突帯文キザミなし	1 12 1 1 7
			突帯文キザミ		3
		胴	削りだし突帯文	突帯2条・沈線	1
			穿孔		1
			突帯文キザミなし		1
					1
	浅鉢	口縁	縫部に強いナデ	内側条痕	1
	鉢	口縁	内に段		1
	不明	口縁	ミガキ	外側条痕	1
不明	深鉢	口縁	丸	ミガキ	1
		底部			1
	浅鉢	口縁	外反		1
		底部	条痕		1
	鉢	口縁	ミガキ		1
			外側強いナデ		1
			丸	ミガキ	1
					1
		胴	くの字に内厚		1
	不明	不明			9
総計					72

(2) 弥生前期

時期	器種	部位	特徴1	特徴2	計
前期	臺	口縁	丸	キザミ	2
					47
			段		32
			沈線		6
			沈線2条～	焼成時、ハクリ	1
					5
		底部			25
		鉢	丸		1
			沈線1条		1
					2
	甌又は鉢	口縁	丸		3
	甌	口縁	丸	キザミ	3

時期	器種	部位	特徴1	特徴2	計
前期	臺	口縁		無文	46
					42
			垂下		6
			面持つ	段	1
					1
			沈線1条		5
			沈線1条～		3
			沈線2条	キザミ	1
					2
			沈線3条～		1
		首	沈線1条		3
			沈線2条		5
			沈線2条～		2
			沈線3条		3
			沈線3条～		1
		胴	沈線5条		1
					74
		ふた	丸		1
			丸	キザミ	1
					39
			沈線1条		18
			沈線1条～		4
			沈線2条		9
			沈線2条～		6
			沈線3条～	キザミ	1
					3
			沈線4条		1
		胴	沈線1条～		3
			多条		2
			ハケメ		3
			綾杉		1
			刺突		4
		首	刺突文		1
			指なで		1
			段綾杉		1
			沈線1条		1
			沈線1条～		1
			沈線2条		3
			沈線2条～	綾杉	2
			沈線3条	沈線	1
			沈線3条～	沈線間刺突	1
			多条		1
		底部	沈線綾杉		6
			沈線間刺突		2
			沈線間竹管		1
			突帯		2
			突帯2条		1
			波状文		1
				有軸綾杉	1

(2) 弥生前期

時期	器種	部位	特徴1	特徴2	計
前期	不明	胴			7
		底部			25
		不明			4
					5
		赤塗り			2
前期 計					491

(3) 弥生中期

時期	器種	部位	特徴1	特徴2	計
中期	壺	口縁	拡張する		1
			上に面を持つ		1
			上下に拡幅		1
			垂下する	キザミ	2
				円形浮文	2
		面持つ		銀齒文	5
				縹々縁付目隠	1
				波状文	2
					26
			キザミ		9
		首	斜格子文		1
			首・指頭圧痕文帯		2
					15
			指頭圧痕文帯		18
		底部	突帯	キザミ目	6
				巻點り付け突帯	1
					26
					2
後半	鉢	口縁	底部		23
			口縁	面持つ	6
			底部		25
		面持つ	外反	突帯	1
			丸	首・指頭圧痕文帯	1
			内彎		1
			上に面を持つ	首・指頭圧痕文帯	2
			穿孔		1
			肥厚		2
			面持つ		5
後半	壺	口縁	丸		123
			上下に拡幅		1
			面持つ	キザミ	4
			首・指頭圧痕文帯		2
					47
		沈線	沈線1条		1
			沈線2条		1
			首	指頭圧痕文帯	1
			胴	二枚貝、刺突	1
			底部		50

時期	器種	部位	特徴1	特徴2	計
中期	高杯	口縁	上に面を持つ		1
		充填			2
		杯	面持つ		2
		脚			6
		台			1
中期	不明	口縁	丸		57
			面持つ		20
		胴	円形、浮文		1
			刺突文		3
			斜格子文		1
		波状文	毛理・クレハ根		2
					2
					3
中期 計					556

(4) 弥生後～末期

時期	器種	部位	特徴1	特徴2	計
後半	壺	口縁	直口		3
			二重口縁		18
		首			2
		胴	小型		2
		甕	二重口縁	文様	1
					59
		高杯	脚		3
		器台	不明	鼓形器台	37
		低脚杯	脚		3
		瓶	口縁		4
		筋鏡車	完形	胴部転用	1
		不明	口縁	二重口縁	74
					63
			注口		1
			胴	押引き波状文	1
			底部	丸底	9
		杯			4
					1
後～末期 計					302

(5) 中世・近世

時期	産地	種別	器種	計
13世紀前半	薩摩窯系	青磁	碗I-5類	2
			碗I類	4
14世紀	薩摩窯系	青磁	碗IV類	4
14～15世紀	備前窯系?	陶器	甕	8
15世紀前半	備前窯系	陶器	擂鉢	1
17世紀	肥前窯系	磁器	染付け皿	1